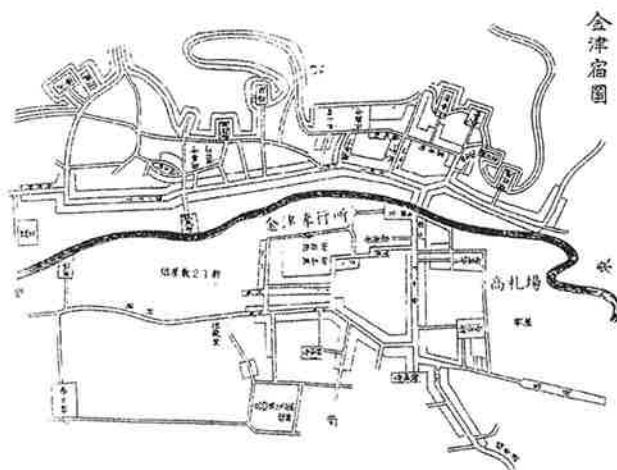
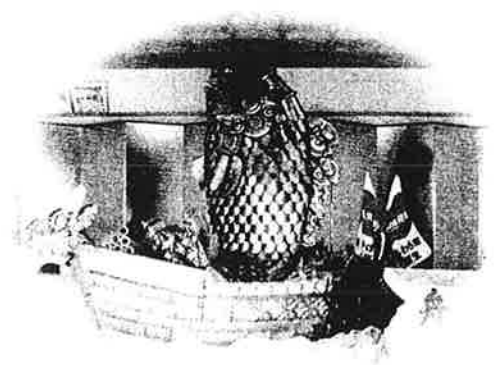
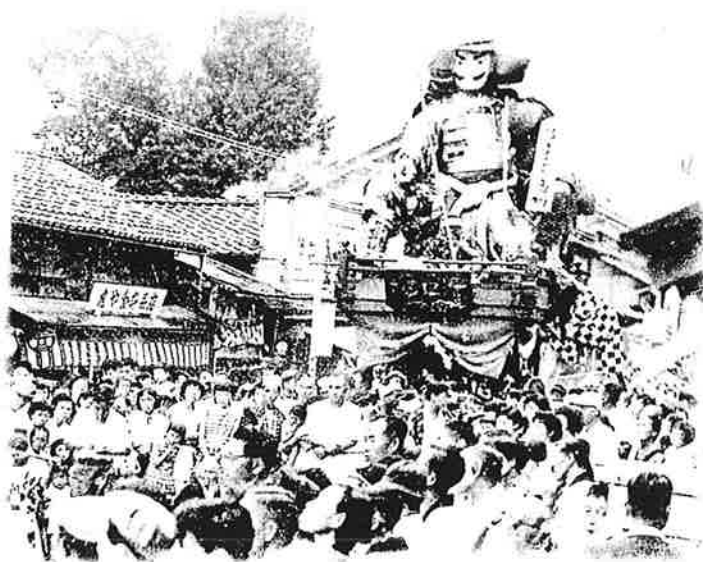


金津祭の変遷



金津祭保存会

H25 年度金津地区区長会

目 次

1. 金津祭の運営主体	1
2. 金津神社の歴史	2
3. 金津祭の歴史	3
4. 金津祭と担当区（当番区）	5
5. 金津祭の3日間	6
6. 金津祭の山車屋台	7
7. 金津祭の山車飾り	8
8. 神社神輿と山車の送迎	9
9. 山車の巡行と御囃子	10
10. 山車の人形	11
11. 山車の前囃子（曲太鼓）と太鼓グループ	12
12. 金津祭と氏子	13
13. 本陣飾り物	14
14. 金津祭を保存していくために	17

参考資料

(1) 金津祭について（思い出）	浅田茂吉 氏	20
(2) 稲田信夫氏のことば		22
(3) 金津祭囃子保存会 会長 佐々木誠三氏の話		24
(4) 金津祭囃子保存会山車太鼓指導 堀田あけみさんの話		26
(5) 金龍太鼓と金津祭について 金龍太鼓保存会 代表 天田将六 氏		27
(6) 六市太鼓について 六市太鼓 代表 田中隆之 氏		30
(7) 山車の歴史（写真集）		31
(8) 金津祭山車人形と御囃子一覧表	佐々木誠三氏提供	59
(9) 本陣飾り物の歴史（写真集）H10～H25	あわら市商工会提供	61
(10) " 題名と材料 H10～H25	"	79
(11) " 成績一覧表 H10～H25	"	83
(12) " 参画の実績 S44～H 9	"	86
(13) " 展示場所 H 9・H24	"	87
(14) " 位置図 H 9～H25	"	88

1. 金津祭の運営主体

金津祭は、あわら市金津地区25行政区のうち、金津市街地内の18地区が主体となって運営し、毎年7月、海の日の前日の日曜日を中日とし、前後の3日間開催されます。

祭のメインは大きな武者人形や歌舞伎役者の人形を乗せた山車です。3つのブロックから山車当番となった区から1基ずつの山車が巡行し、18区の本陣を巡ります。各区の本陣においては迎えの気持ちを表すため、古くから伝承されている本陣飾り物を製作して山車をお迎えします。山車が本陣に到着すると、曲太鼓と子供踊りを披露します。（一部は当番区の世帯数が少ないため踊り等ができない区もあります。）

金津祭は参加する地区の区長をはじめ、青壮年団、婦人会、老人会等が一丸となってつくり上げた祭で、祭全体を統括しているのは金津地区区長会です。他に子供たちの踊りを指導する先生方、子供たちのお囃子の指導する金津祭囃子保存会、笛の指導をする夕笛会、三味線の三弦会、前囃子の太鼓を指導・支援する金龍太鼓、市姫太鼓等の多くの方々の協力があって祭が成り立っています。

祭の統括が金津地区区長会であっても、祭本来の精神は神事であり、神や自然への畏敬の念を表すために、各本陣においては祭壇を設けます。祭の日には金津神社の神輿とともに宮司が渡御し、各本陣にて区民の安全と平安を祈ってお祓いを行います。

また、本陣飾り物を伝統文化の面から支援しているのはあわら市、あわら市商工会、あわら市観光協会で、本陣飾り物コンクールを実施することにより、各区の創造意欲を高め、創作技術の向上を図っています。平成25年度よりスタンプラリーも企画され、あわら市ばかりでなく福井県内外に広くPRすることにより、さらに大きなイベントになることでしょう。

金津祭は、金津地区と金津神社さらに祭を支える多くの人達の情熱が注がれ、山車巡行は110年以上、本陣飾り物は130年以上、神輿渡御にあっては260年以上も継承されている伝統文化であります。

2. 金津神社の歴史

金津神社は、継体天皇の御勸進で大溝神社といたしました。祭神は、神日本磐余彦命（かんやまといわれひこのみこと）、武甕槌命（たけみかづのみこと）、経津主命（ふつぬしのみこと）、天兒屋命（あめのこやねのみこと）、姫大神（ひめおおかみ）であります。由緒は古く、平安時代の延暦 11 年(792 年)奈良春日明神の御分神を合祀し、大溝神社とも春日神社とも称しました。

- 保元元年(1156) 第 77 代後白河天皇の勅使中納言時実卿と興福寺の宗徒伊豫法眼等が神輿の御供をして御下向になり、神輿は金津神社に御寄付されました。僧侶社人庄官等 28 人を置いて天下泰平国家豊饒を祈誓し、春秋祭典には郷中 16 ヶ村へ神輿渡御されました。これが金津祭の始まりです。
- 天正 3 年(1575) 織田信長に社領を没収され、社殿を初め神輿、神宝など焼失しました。但し、御神体だけは一部焼失しましたが保存することができました。（現在でも存在しています。）
- 宝永 4 年(1707) 氏子が協力して社殿、拝殿を再興する。
- 寛延元年(1748) 福井藩主より手鉾、出し物、葵紋提灯の寄進があり、大溝神社は 3 月 11 日、春日神社は 8 月 15 日と春秋の両度に祭日を定める。春の祭日には神輿の渡御も行われる。
- 安政元年(1854) 3 月神輿を新調、古式祭礼の復活になる。
- 明治 5 年(1872) 郷村 48 ヶ村の郷社に加列される。
- 明治 10 年(1877) 郷社大溝春日神社に改称され、本陣飾り物が復活して始まる。
- 明治 30 年(1897) 社殿等を修復し境内を拡張する。山車巡行が始まり、町内巡行を年中行事とする。
- 明治 39 年(1906) 御鎮座 1100 年祭を行う。
- 昭和 23 年(1948) 福井大震災により社殿等倒壊する。
- 昭和 24 年(1949) 倒壊を免れた町内の市姫神社の社殿を春日山山頂に移転し、市姫神社、金山神社と白山神社を本殿に合祀して、総社金津神社と改称する。
- 昭和 46 年(1971) 鉄筋コンクリート造の社殿を造営し、7 月 18 日正遷座する
- 昭和 47 年(1972) 6 月 2 日に鉄筋コンクリート造平屋建の社務所が竣工し、祭礼中日を 7 月 20 日から 6 月 3 日に変更。例大祭は 6 月 2 日と定める。
- 昭和 51 年(1976) 社務所 2 階部分を鉄骨造で増築する。
- 平成 7 年(1996) 7 月 20 日が海の日と制定され休日になったことから、金津祭の中日を 7 月 20 日に戻す。例大祭は 7 月 19 日に行う。
- 平成 15 年(2003) 海の日が 7 月第 3 月曜日（ハッピーマンデー）に変更されたことから、海の日の前日に金津祭の中日がくるように変更される。例大祭は 7 月 19 日に行う。

3. 金津祭の歴史

表 1-1 金津祭の歴史

年 代	H2013年より	神社神輿	本陣飾り物	山車
保元元年(1156年)	857年前	神輿を渡御する		
元和 9年(1623年)	390年前		本陣飾り物始まる	
寛延元年(1748年)	265年前	神輿渡御(大溝神社)		
安政元年(1854年)	159年前	神輿を新調する		
明治10年(1877年)	136年前		本陣飾り物の復活	
明治30年(1897年)	116年前			山車巡行する
平成25年(2013年)	—			

従来金津神社の例大祭は7月19、20、21の3日間でしたが、昭和47年(1972年)社殿、社務所の竣工に伴い、金津祭の中日を6月3日に変更されました。例大祭の清祓と浦安の舞の奉納は6月2日に行われるようになりました。

その後、平成7年(1996年)7月20日が海の日と制定されたことから、金津祭も7月20日に戻りましたが、平成15年(2003年)海の日が7月第3月曜日(ハッピーマンデー)に変更されたことから、海の日の前日に金津祭の中日がくるように変更されました。例大祭の祭事は7月19日に行われます。

金津祭は、

- ① 金津神社の神社神輿の渡御
- ② 金津地区の南部、東部、西部の3つのブロックから各1基、合計3基の山車の巡行
- ③ 神社神輿と山車は、各地区の本陣(18カ所)を渡御及び巡行する。
- ④ 本陣においては、日用雑貨品等を使った飾り物を製作して神社神輿と山車を迎える。
- ⑤ 本陣では、宮司による御祓と、山車について回る前囃子として曲太鼓と子供踊り等の奉納が行われる。

以上より、祭の多種多様さは全国的に見ても珍しい祭りとなっています。

金津神社の格式

金津神社は、常の神社と違い、「神社本庁献幣使（けんぺいし）参向（さんこう）神社」という格式を持つ神社であります。

「神社本庁献幣使参向神社」とは、昔の「官幣社」の待遇を受ける神社と考えれば良いかと思えます。

福井県内では神社が一千七百余社あり、その内神職が常駐する神社（本務神社）は百二十社、その内の金津神社を含む十五社のみが「神社本庁献幣使参向神社」の格式を持っています。

表 1-2 神社本庁献幣使参向神社（参向日順） 15 社

参向月日	市町村	神社名	祭典名
4 月 13 日	福井市	福井県護国神社	例祭
20 日	三国町	大 湊 神 社	〃
5 月 4 日	今立町	大 瀧 神 社	〃
6 日	敦賀市	金 崎 宮	〃
19 日	三国町	三 国 神 社	〃
6 月 10 日	池田町	須波阿須疑神社	〃
7 月 19 日	金津町	金 津 神 社	〃
8 月 25 日	福井市	藤 島 神 社	〃
9 月 4 日	敦賀市	気 比 神 宮	〃
15 日	武生市	總 社 大 神 宮	〃
24 日	武生市	大 塩 八 幡 宮	〃
10 月 2 日	福井市	佐 佳 枝 廼 社	〃
9 日	織田町	劔 神 社	〃
15 日	丸岡町	國 神 神 社	〃
20 日	福井市	神 明 神 社	〃

4. 金津祭の担当地区（当番区）

金津地区は25の行政区があり、祭に当番を担っている行政区は18区です。その内訳は、15の地区が山車を、2つの地区は神社神輿を、1つの地区は世帯数が少ないため本陣飾り物のみの参加となっています。

山車は15の地区を表2「金津祭の担当区」のように南部、東部、西部の3つのブロックに分け、各ブロック内で順番に担当しています。

神社神輿は東部、西部、南部のブロックで1年ごとに担当し、地理的な状況から東部においては旭区が、西部においては稲荷山区が担当し、南部においては各区持ち回りの輪番で行っています。

表2 金津祭の山車・神社神輿当番区

		南部ブロック	西部ブロック		東部ブロック		年度
山 車	1	東	1	十日	1	水口	H25年
	2	榛ノ木原	2	下八日	2	天王	H26年
	3	古	3	坂ノ下	3	中央	H27年
	4	六日	4	春日	4	新富	H28年
	5	新	5	脇出	1	水口	H29年
	1	東	6	上八日	2	天王	H30年
神社神輿	上記より1地区		稲荷山		旭		輪番
本陣飾り物	上記5地区		八日区を加え8地区		上記5地区		毎年

山車を担当する当番区は、山車と人形の組み立て、前囃子屋台と本陣飾り物の製作、子供太鼓と御囃子の練習、前囃子の曲太鼓と子供踊等の練習が必要となります。

神社神輿の担当区は、神社神輿のかつぎ手（力士）の確保と本陣飾り物の製作となります。

神社神輿並びに山車を担当しない区は本陣飾り物のみの製作となります。

なお、地区内保有の神輿がある区は、子供会等が当該地区内のみ神輿の渡御を行います。

5. 金津祭の3日間（前日祭、中日祭、後日祭の日程）

<前日祭>

金津神社の例大祭には担当区（東部、南部、西部）より選ばれた四人の女子小学生が「浦安の舞」を奉納します。金津祭の日が7月20日や6月3日の時は前日に「浦安の舞」が奉納されていました。現在は7月19日金津神社例大祭日に行われています。

山車の担当区では、金津神社の宮司による山車と区所有の神輿の御祓を受けた後に、地回りとして自分の区内を山車と前囃子、子供踊りを本番と同じ形態でリハーサルを兼ねて区民に御披露目します。この時に山車の具合をチェックします。

金津神社の宮司は、山車担当区以外にも各地区の神輿の御祓をします。

平成25年からは、金津神社境内において曲太鼓の競演が行われます。金津地区の曲太鼓のグループのほか、金津祭の練習で育ってきた各地区の青壮年団で構成されたグループが出演して祭を盛り上げてくれます。

「本陣飾り」については、午後から本陣飾りコンクールの審査が行われます。夕刻には審査の結果発表と表彰が行われ、入賞区には見学者が多く集まります。

<中日祭>

①神社神輿

神輿渡御にあたり、御神体を神輿にうつす神事を行った後、宮司を先頭にして神輿当番区のかつぎ手により巡行コースに従い18区の本陣を渡御します。宮司が馬に乗って渡御していた時代もあるそうです。

②山車の巡行

山車の巡行は、事前に各区で検討した上で巡行経路を決定します。3基の山車が巡行コースに従い、各区の本陣を巡行します。18区の本陣を巡行しますが、旭区と稲荷山区については道路状況により山車の巡行ができないので前囃子と子供踊りだけの巡行となります。

山車の列は、

（先頭）担当区所有の神輿←花車・前囃子屋台←本山車（後方）の順です。

一般的には、山車や鉾により道を清め、その後に神様が乗った神輿が練り歩く形が多いのですが、金津祭では神輿が先頭となって巡行します。

<後日祭>

祭の中日までは、来訪した客の接待が主となるので、後日は家族のみで静かに祭の余韻を楽しむ日となります。後日も休日となりますが、祭当番区の人たちや、区の役員の人にとっては祭の精算や後片付けでゆっくり休むことはできません。

以前は、金津神社境内にて山車担当区の子供による踊りや曲太鼓の披露などのイベントが行われていましたが、近年は行われていませんでした。これに変わり、平成25年より前日祭に復活するようになりました。

6. 金津祭の山車屋台

金津祭に使用する山車屋台は、南部ブロックに1基、東部ブロックに1基、西部ブロックに3基あります。（表3 金津祭山車保存記録）

山車屋台の上段の広さは1.8m×2.4mで、中央に大きな人形が取り付けられます。山車の最高高さは6mになります。四角には金津神社より御祓された御幣（ごへい）を取り付けます。御幣は依り代（よりしろ）とも云われ、ここに神が依り憑（よりつく）ことからつけられたと言われています。御幣を取り付けた時から山車屋台は神聖な場となるため、祭日までは動かしてはならないとされています。巡行する時には、電話線等が人形に引っかからないようにするため架線係（3～4人）がここに乗ります。

下段は上段より一回り小さく、1.2m×2.1mで、前方の左右に締め太鼓、中央に平太鼓を置き、小学生の子供2人が本陣間を交代で演じます。その後に三味線が2人正座で、さらにその後は篠笛が2人乗り、合計6人で各本陣間をお囃しします。本陣飾り物に到着しても、御囃子の区切りがつくまでは演奏を続けることになっています。なお、人形を支える芯棒が下段に延びてきていて下段のスペースは狭く、笛を吹く人の尻は半分外へ出た状態となります。

山車の車輪は前方に大輪が2つ、後輪は舵取り用の小さい車輪が1つ、合計3輪で構成されています。車輪が円滑に回るため、車軸にはトリモチを巻きます。最近製作の山車にはベアリングを用いているところもあります。ベアリングを用いた山車は回転が軽いため、巡行には注意が必要です。

表3 金津祭り山車保存記録
東部ブロック（1基） 西部ブロック（3基） 南部ブロック（1基）

	山車巡行区	管理区	保管場所	製作年月日	製作修繕記録
1	(東部ブロック) 新富区 水口区 天王区 中央区	新富区 水口区 天王区 中央区	金津神社敷地内		
2	(西部ブロック) 十日区 脇出区 春日区	十日区 脇出区 春日区	金津神社敷地内		・製作 昭和初期ごろ ・製作人 ・修理 福井震災にて破損、震災後の昭和24年ごろ大車輪以外の部分を修復
3	(西部ブロック) 上八日区 八日区 下八日区	上八日区	上八日稲荷神社敷地内	大正13年7月	・制作人 金津町八日 川片外蔵 ・車作人 三国町岩崎 多田五朗吉
					・平成20年12月7日 後輪部修理(瀬川鉄工) ・平成21年12月20日 前輪部修理(瀬川鉄工)
4	(西部ブロック) 坂ノ下区	坂ノ下区	八幡神社前	平成8年8月	・製作人 春日区 端 静夫
5	(南部ブロック) 六日区	六日区	六日区内山車倉庫	昭和30年7月 昭和34年	・新調引屋台入魂式 ・鍔金具謹製 鳩峰堂 伏木儀三 富山県高岡市鉄砲町
	古町区 東区 新町区 榛ノ木原区	古町区 東区 新町区 榛ノ木原区			・昭和60年4月 前後車輪修繕

7. 金津祭の山車飾り



紅白生地

ケヤキ以外の木材に右方上がりで巻く。
主に人形を支える柱、太鼓台、電線棒。

太鼓の配置

太鼓は屋台の前側に出し、締め太鼓、平太鼓、締め太鼓の順に並べ設置する。角度に注意し太鼓を傷つけないよう、音が響くように設置する。

水引幕

向拝幕（ごはいまく）とも言う。金津祭りの場合1枚物が多く、4隅で切れていない場合は、左側後方より巻き始める。（左側後方が繋ぎ目となる）

水引幕房

水引幕房（向拝幕房）は、前方中心に房を吊す。子供の顔を出すため2カ所吊す区もある。

揚巻房

向拝幕は巻くらない方が良いが、暑い時期なので巻く区が多い。向拝幕房より小さい房や紐を使用する。

囃子方（雇用者）が巻くってはいけない。

四方房

隅飾り組紐、とも言われている物で四隅に吊す。

乗車前の注意・確認事項

1. 大車輪のクサビが摩擦で薄くなっていないか？また、トリモチが正確に塗ってあるか？
 2. 前の大綱、後の短綱がしっかり結ばれているか？
 3. 乗車して安全か？
 4. 音響設備、照明設備はできるだけ目立たないように成っているか？
 5. 雨対策はできているか？（特に夕立に注意）
- 以上確認する。

8. 神社神輿と山車の送迎

神社神輿は御神体がお乗りになる神輿ですので、神輿に人が乗ってはいけません。一方、山車には御神体は乗りませんが、御幣を取り付けることによって神が憑いた乗物となり、この山車に乗り御囃子する人も含めて神様の使いとして、道中や街を清める役目をしています。以上の点を考慮に入ると、神社神輿と山車の送迎のあり方が理解しやすいと思います。

神社神輿の渡御と山車の巡行は、担当の区長を頭として歩みを進めます。これを迎える区の区長は、区境まで迎えに行き、本陣まで案内します。本陣にて前囃子と子供踊り等の奉納が終わると、区境まで見送ります。なお、一度通った神輿や山車が巡行経路の都合で戻ってくる場合があります。この場合も同様にお迎えとお見送りをします。

神社神輿と山車が同時に入ってきた場合は、神社神輿を優先します。また、行き山車と帰り山車がぶつかった場合には、行き山車が優先となっています。このように祭りのルールが確立していると同時に、当番区以外の区においても送迎のルールを守り、礼儀を尽くすことが求められています。

山車の巡行も宵になると、当番区以外の区は10人程度で同じブロックの山車を迎えに向かいます。区長及び青壮年団長は弓張り提灯を、他の人たちは2つの高張り提灯を持って当番区の夕食で休憩しているところに集合します。山車が宵山となって自分の区に戻る道中は、たくさんの高張り提灯の燈に導かれて、帰り囃子の七調目（しっちょめ・ひっちょめ）が流れる中をおごそかに進みます。提灯の明かりと人出で祭りは最高潮に盛り上がります。また、提灯の明かりで進む山車は風情のある情景となります。



平成6年 六日区提灯行列

9. 山車巡行と御囃子

山車巡行は、昭和 30 年頃までは金津神社の西側（現在の「いこっさ」の駐車場附近に 3 基とも集合し、御祓を受けた後に各々の巡行経路を経て、自分の区の本陣を最終地としていました。

しかし、現在では本陣の数も増え時間も遅くまでかかるため、3 基の山車は各々の担当区の本陣より出発します。この時山車で演奏する曲は「行き囃子」です。

「行き囃子」は、山車の人形の場面に合わせた曲目となることが多く、祭りの始まる 5 月頃より練習します。「行き囃子」は地区によって毎回変わることも多々あります。

また、巡行ルートの関係でどうしても一度通った道に戻る場合があります。このことを「向い山」といい、御囃子も「戻り囃子」として曲目を変える場合もあります。

そして夕食を済ませ、自分の本陣に向けて帰り道に着くことを「帰り山」といい、御囃子の曲目は「七調目」（しっちょめ）を演奏します。この曲は全ての区で共通の曲目となります。地区によっては、曲目を変えないで毎回同じ曲目をしている場合があります。これを「万年囃子」といいます。「七調目」は元来、大人がたたくものとされていましたが、今は子供たちがそのままたたいているところが多いようです。

御囃子の曲は、毎年「金津祭囃子保存会」が譜面をつくっています。御囃子の練習は、5 月中旬から始まり週 3 回、各 1 時間で行います。山車に乗せる子供太鼓（3 つ）と三味線は金津祭囃子保存会あるいは三弦会（三味線のグループ）の方が指導します。篠笛は夕笛会の方が指導します。祭りの練習をやることによって、各地区に三味線や笛のできる人の育成も祭の継承には欠かせません。子供太鼓は、道中が長いので最低でも 6 名以上必要とされています。

今後は、金津祭を代表する曲目を確定し、定番の曲目が流れるようにすることも望まれています。現存する「金津音頭」、あるいは、まだありませんが「金津節」など金津祭を特徴できる囃子の確立が望まれます。

（参考：表 4 金津祭山車人形と御囃子一覧表）（金津祭囃子保存会の佐々木誠三氏提供）

10. 山車の人形

金津祭で一番注目を集める山車人形は坂井市三国町の人形師（岩堀氏）に製作していただいています。平成 24 年までは当番区で何の人形にするかを決めたものを岩堀氏に製作してもらっていました。しかし、平成 24 年に岩堀氏が急逝されたため、平成 25 年は、この仕事を受け継ぐことになった兄とご家族の協力で製作していただくことになりました。今後、人形作りの勉強に励んでいただき、立派な後継者になっていただけるよう支援していきたいものです。それとは別に、将来の後継者問題を解消するため、金津地区内での人形製作にチャレンジすることも今後の課題となります。なお、金津祭の人形は三國祭の人形とは別に製作したものです。

表 4 の金津祭山車人形と御囃子一覧表によると、昭和 15 年以後の内容が一覧表としてまとめられています。途中で空白のある所は、資料がないため確認できませんでした。福井大震災による火災で多くの資料が燃えてしまっていますので、福井大震災以前の資料をお持ちの方からの資料提供をお待ちしています。

表 5 山車の参加区の歴史

年数	年代	南部ブロック	西部ブロック	東部ブロック	参加数
1940年以前	戦前	古、新、六日	八日、下八日、上八日、脇出	水口	8
1952年	昭和27年	東		天王	10
1953年	昭和28年			新富・旭(共同)	11
1954年	昭和29年		坂ノ下		12
1959年	昭和34年			新富(単独)	12
1963年	昭和38年		十日		13
1983年	昭和58年			中央	14
1988年	昭和63年		春日		15
1997年	平成 9年	榛ノ木原			16

(新たに参加した区名のみ記す)



山車格納庫 八日・上八日区(上八日区)



山車格納庫 東部ブロックと十日区
金津神社敷地内



山車格納庫 坂ノ下区



山車格納庫 六日区

11. 山車の前囃子と太鼓グループ

金津祭の山車には花車として前囃子がつきます。昭和 53 年以前は、花車と前囃子の屋台は別々になっていました。また前囃子の屋台は、当初「底抜け」といって、屋台に床がなく歩きながら演奏していました。昭和 60 年の古区の花車を最後に花車は見かけることがなくなりました。現在では、前囃子のトラックの屋台に花飾りを付けてその名残を見ることができます。

金津祭は、本陣から次の本陣の間の道中は、山車の子供太鼓と三味線と笛による御囃子を演奏しますが、本陣に着くと大人による曲太鼓（前囃子）が奉納されます。すべての本陣で行われるので、48 回（18 本陣×3 山車）の曲太鼓が演じられます。（祭当日は、金津の街中が奉納太鼓で満ちあふれていることになります。）

前囃子は、当番区の区民が和太鼓を練習して演奏します。表 5 の通り各地区には祭の時のみ太鼓をするグループ（8 グループ）と、通年を通して太鼓をしているグループ（7 グループ）があります。全部で 15 グループが金津地区内に太鼓グループとして存在しています。曲太鼓をするグループが狭い地域に 16 組あることは極めて特異なことといえます。金津祭の大きな特徴で、金津の財産といえるでしょう。



昭和 60 年 古区 勸進帳弁慶



表 7 金津祭の各区にある太鼓グループ（曲太鼓）

担当区（南部ブロック）		担当区（東部ブロック）		担当区（西部ブロック）	
古	二本松太鼓	水口	金龍太鼓	脇出	※龍太鼓
六日	六市太鼓（H21年より）	天王	天獅子太鼓	上八日	※稻荷太鼓
新	金山太鼓	中央	輝龍太鼓	十日	※しょうぶ太鼓
東	※東太鼓	新富	七福神太鼓	下八日	大鳥太鼓
榛ノ木原	※橋南太鼓			坂ノ下	※八幡太鼓
				春日	※春日太鼓

※印：祭のときのみ結成

12. 金津祭と氏子

金津祭は、金津神社の祭礼として始まったのが今日まで継承されてきました。しかし、金津祭に参加している区は、全て金津神社の氏子（うじこ）であるかといえば、そうではありません。金津神社の氏子でない区も金津祭に合わせて祭に参加しています。市街地にある下八日と坂ノ下は自分たちの神社を持っており、金津神社の氏子ではありません。それでも金津祭に参加しているのは、宿場町として発展してきた金津の中心地であったからと思われます。神社神輿の渡御にあたっては、金津神社の宮司も氏子かどうかの区別なく渡し、お祓いをします。

街が外に広がっていくことにより新しい行政区ができ、氏子でない区が増えてきました。将来の金津祭を考えたときに、祭りの精神は守りながら氏子でない区の人々も交えた新しい金津祭の形態を考えていく必要があるでしょう。

表7 金津祭に参加している区の氏子

南部ブロック		東部ブロック		西部ブロック	
古	市姫神社	水口	春日神社	脇出	
六日	市姫神社	天王		八日	白山神社
新	金山神社	中央		上八日	白山神社
東		新富		十日	春日神社
榛ノ木原				下八日	大鳥神社
				坂ノ下	八幡神社
				春日	

金津神社は、市姫神社、金山神社、白山神社を合祠していますので、これらの神社の氏子は金津神社の氏子に含まれます。

春日神社は、当初より金津神社の元となっています。

空白部は、他の神社がなく直接金津神社の氏子となっている区です。

13. 本陣飾り物

(1) 金津と本陣の歴史

金津は地名の由来を古代の鉄（金）の集散地（津）に求める説があるほど北陸道の要衝でした。中心部には竹田川が流れ、北陸道は市姫橋（金津大橋）で結ばれていました。鎌倉期から資料にみられ、金津上野は「義経記」の「吹き上げの場」として登場します。朝倉氏時代には家臣団の有力武将であった溝江氏が、この地に館を構え支配していましたが、朝倉氏滅亡後、一向一揆によって滅亡しました。

近世の金津は宿場町として栄え、北金津（十日、八日、坂ノ下、水口 411 戸）、南金津（六日、古 140 戸）と金津新町（88 戸）に分かれていました。＜安永 2 年（1773 年）資料＞ 慶長 10 年（1605 年）頃の「越前国絵図」に「北金津町」とあり、近世初頭から町場でありました。また、おなじ慶長 10 年に、珠姫の婚儀の御供輿に関連して「越前金津の上野まで参り・・・」（三壺記）とあり、茶屋が金津にあったと推定されます。

福井藩は慶長 18 年（1613 年）に南金津の地に金津奉行所を置き、越前北部の広大な地を金津奉行に委ねました。金津奉行所では行政、司法、警察などの事務を司りました。そして、金津奉行所の周辺には問屋、旅籠、本陣がありました。本陣の由来は明確なものとして、寛永 11 年（1634 年）の將軍家光の上洛の際に、宿泊予定の邸宅の主人を本陣役に任命したのが起源とされ、翌年の参勤交代制度の発令とともに制度化されました。本陣は大名や旗本、勅使、官、門跡などの宿所として指定された家で、一般の者を泊めることは許されておらず、営業的な意味での「宿屋の一種」とはいえませんが、宿役人の問屋や村役人の名主などの居宅が指定されました。また、本陣につぐ格式の宿として脇本陣がありました。本陣は南金津においては金津奉行所に、北金津は坂ノ下の黒坂宅（十文字屋）でした。

武士は常に戦陣にあることを心がけていて、参勤交代も行軍の体制をとっていたので、その宿泊するところを「本陣」といいました。したがって本陣は大名が泊るにふさわしい玄関に式台付きの建物が選ばれました。宿泊する大名やそれに準ずる高官の名前は高札場に掲示されました。

金津の「本陣飾り物」は元和 9 年（1623 年）江戸幕府が開かれた間もない頃に始まったとされています。これは金津奉行所に来る役人たちをもてなすために、町人が日常生活用品を持ち寄り、飾り物を作ってもてなしたといわれています。金津奉行所は安政 4 年（1857 年）に廃止になります。

金津奉行所がなくなった後も、本陣飾り物は継続して行われたのですが、資料として残っているのは、明治 10 年（1877 年）に本陣飾り物が復活したとなっています。どれくらいの期間が中断されていたのかは不明です。その後、本陣飾り物の美しさやにぎやかさに魅かれ、本陣のない地区でも造られるようになり、祭のにぎわいものの一つとして定着していったものと思われます。本陣作りは 390 年の歴史がありますが、確かなところでは 136 年の歴史といえるでしょう。

飾り物を飾った各地区の本陣を一つの社とみなし、祭壇を設け、お神酒をお供えして神社神輿と山車をお迎えします。このように本陣は祭の巡行する人たちの休憩所でもあり、各地区を代表する神聖なる神の存在する場でもあります。

現在では本陣には飾り物があるのが当然と見られていますが、本陣飾りコンクールが行なわれるまでは、本陣とは神の存在する場所であり、祭壇を設け、お神酒と盆栽等だけを飾って山車を迎える区もありました。

このように、金津祭において、本陣の意味が従来の解釈と異なり、各地区を代表する神をお迎えする神聖な場を「本陣」というようになったのも、祭が伝承される中で自然に受け入れられてきたものといえます。金津祭の大きな特徴がこの「本陣」の存在といえます。

(2) 本陣飾りコンクール

昭和 35 年に商工会法が施行され、地域振興事業の一環としてあわら市商工会(当時 金津商工会)主催による飾り物コンクールが始まりました。昭和 43 年第 23 回国民体育大会が福井県で開催された時は、国民体育大会金津町実行委員会が主催となって本陣飾りコンクールが行われ、金津町で行われたレスリング競技を飾り物で表現した十日区が第一位となって、当時の坪内町長と、中川福井県知事から表彰を受けました。

現在の表彰はあわら市長、あわら市議会議長、商工会長、あわら市観光協会長、県商工会連合会長、県観光連盟会長、福井新聞社長より 7 賞が設けられ、審査によって表彰状と副賞が贈られています。コンクールに参加する区には、あわら市商工会より一区につき 5 万円の補助金が助成されます。審査は前日祭の午後に行われますが、審査基準として下記の視点から評価されます。

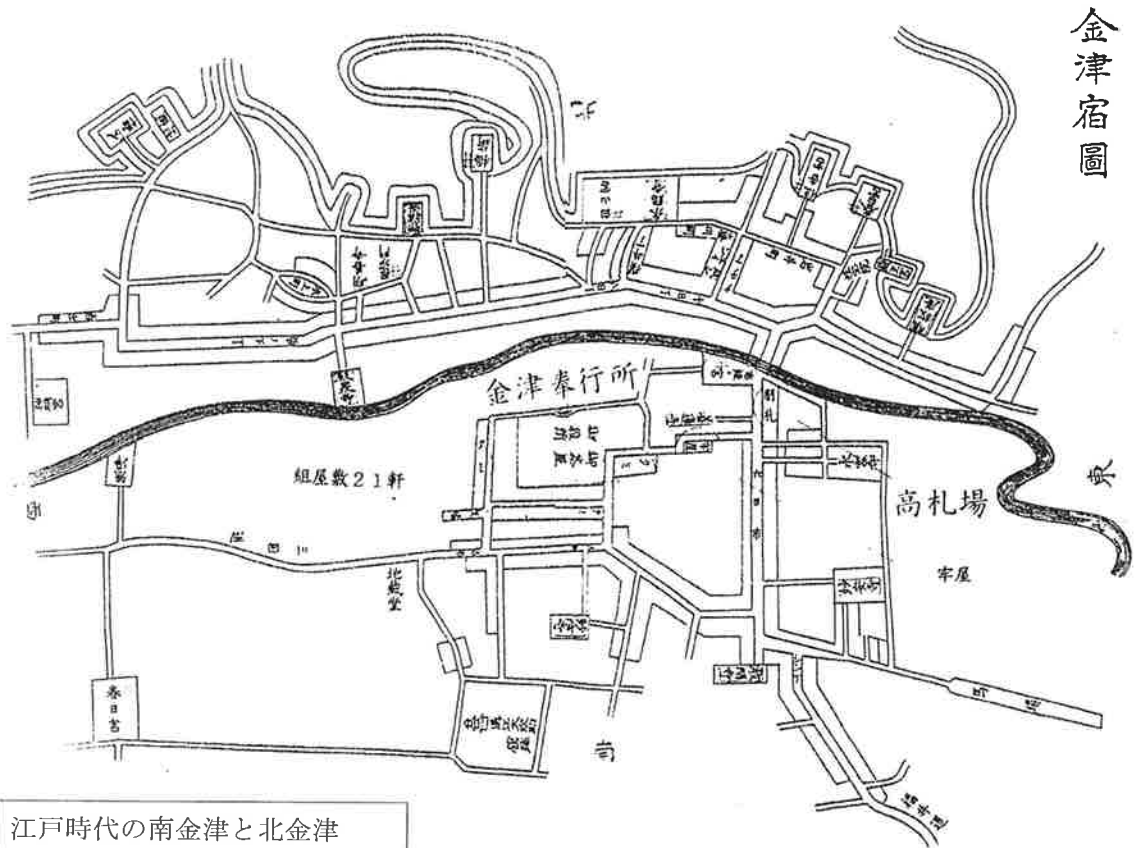
- ① アイディアの視点(創意工夫がある。奇知に富む。話題性がある。)
- ② 技術の視点(細部にわたり完成度が高い。創意工夫がある。)
- ③ デザイン(造形美に優れる。配色に富む。)
- ④ 素材の活用性(復元性に優れる。素材の組み合わせに優れる)

これらの視点から審査し、総合点の高いものから表彰されます。

本陣飾りのルールとしては厳密なものはないのですが、材料として台所用品、ガラス、プラスチック製品、金物類、漆器、陶磁器類で、工作でなく素材を復元することができるように作ることが原則となっています。鉄筋や木で骨組みを作り、これに接着剤で貼り付けることは認められています。

平成 25 年からは新たな試みとして、本陣飾り物を巡るスタンプラリーが実施されます。また、「本陣飾り」を全国に発信するためと、本陣飾りを伝統行事として保存していくために、あわら市文化財資料館「イコッサ」に本陣飾り展示コーナーが設けられます。その他、JR 芦原温泉駅と「イコッサ」間の道中も風情ある散策コースとして整備し、本陣飾り展示コーナーを設ける計画があります。

金津宿図



金津宿圖

江戸時代の南金津と北金津
慶長十八年（1613年）頃の図
越前国名跡考より

至細呂木宿

大溝春日社



14. 金津祭を保存していくために

(1) 金津祭の現況

少子高齢化と核家族化により、金津地区市街地の世帯数が激減しています。特に西部地区の八日区、下八日区は世帯数が 30 世帯以下となり、脇出区、上八日区も 50 世帯以下です。g その少ない世帯も高齢者だけの世帯が少なくありません。このような状況の中で、八日区は平成 16 年と 23 年と山車を出すことができませんでした。今後も単独で出すことはできないものと推測できます。

山車を出すためには「人」と「お金」がかかります。この問題を解決していくことが、金津祭を保存していくための大きなテーマになっています。

一方、本陣飾り物については各区とも青壮年団を中心として製作しており、世帯数が減少しても年配の方が協力することにより製作に支障をきたすことはないようです。経験と時間的余裕のある年配の方がやることにより技術のアップも図られることもあります。あわら市も他市にはない魅力ある文化を大切にしようということで、本陣飾り物の常設展示場「イコッサ」を建設しました。イコッサばかりでなく街なかにも常設展示場が設置され、見て歩きができる事になっています。今後、新幹線開業に向けた「街づくり」の一環として重要性が増すでしょう。

(2) 金津祭の問題点

① 「お金」の問題

近年では山車当番区となると前囃子、子供踊り、人形山車を出すのが一般的となっています。当番区の世帯数にもよりますが、固定経費として約 300 万円かかります。固定経費の内訳は、人形製作費、前囃子車飾付費、囃子方・踊り子衣装費、車・太鼓等のレンタル費、指導お礼等です。固定経費のほか、当日の食事費等約 50～100 万円かかります。これらの費用のうちあわら市より金津祭山車保存事業費として山車 1 基当たり 80 万円（平成 25 年実績）の助成がありますが、あとの約 300 万円程度をなんらかで集めねばなりません。収入の大半は一般の人たちから出していただく祝儀金です。祝儀金を広く集めてはいますが、その元は今まで自分が当番でなかった時に出した祝儀金が戻っているにすぎません。ですから、世帯数の少ない区にとっては 1 世帯当たりの負担は非常に大きなものになっています。また、小さな区でなくても、個人差により大きいものがあります。このまま祝儀金に頼った祭では、今後の世帯数の減少、世代交代による祭への意識の変化により、収入が減少することが推測されます。

② 「人」の問題

前述したように、世帯数の少ない区においては前囃子、子供踊り、山車巡行のための人は明らかに足りません。必要な人員の半分にも満たない状況です。各区においては、元の住民や孫、友人等に協力を求めて出しています。また、祭を出していない他区からの応援もあります。「人」の問題はそれでも何とか工面することによりやっているのが現状です。「お金」の問題からす

ればまだ解決方法があります。

(3) 保存のための取り組みについて

① 金津祭検討委員会と金津祭特別委員会の設立

「お金」と「人」の問題は10数年前から指摘されてきました。金津地区区長会としては何度か立ち上がりながら、区長任期の壁にぶつかり立ち消えとなってきました。平成17年には「金津祭山車保存会」が発足しましたが、市からの補助金を受け取るだけの団体でしかありませんでした。

平成23年金津地区区長会の強い決意のもとに金津祭検討委員会が設立されました。委員には区長だけでなく幅広く祭に関係する人たちが入って検討してきました。2年間、資料集めと、検討を重ね、24年末に金津地区区長会に提案書が提出されました。区長会ではこの提案書を受けて平成25年に金津祭特別委員会が設立されました。特別委員会では金津祭の保存継承に向けて責任をもった改革案を提示し、実現に向けてあわら市のほか各関係団体と交渉にあたっています。

② 金津祭の今後の方向

金津祭は他市町の祭の祭と違って、神輿渡御、人形山車巡行と本陣飾り物といずれも歴史ある伝統行事です。この大切な伝統文化を金津地区の大きなイベントとして、金津地区全体で支え、継承していかなければなりません。現在は金津祭を担っているのは金津地区25区のうち18区ですが、25区が何らかの協力のもとに保存継承していこうとしています。

歴史ある祭の形態は守りつつ、問題となっている「人」と「お金」については、時代に合わせた考え方で変えていかなければなりません。

金津祭をPRしていくことも大切ですが、見に来た人に満足してもらえる祭、祭を担当している人が満足してもらえる祭のするためにどうしたらよいかを考えていかなければなりません。そのためには当番区の区割りや合併等も視野に入れなければなりません。また、コースの設定も人が集まりやすい方法を考えていかなければなりません。

本陣飾り物についても、常設展示場のさらなる建設を行うとともに、新しい企画として平成25年からはあわら市商工会主催による本陣巡りスタンプラリーを始めました。また、本陣巡りツアーバスも企画され官民一体となった金津祭になろうとしています。

平成26年には北陸新幹線の金沢までの開業が始まります。今後福井県への延伸に向けて、あわら市も変わっていかなければなりません。変化していく基本はにぎわいのある街づくりです。新しい交通網により人が出ていたり、通過するだけとはなりません。伝統と文化にあふれた街、人が滞留してくれる街づくりをする必要があります。そのひとつの財産として金津祭を保存継承していきましょう。

祭を動かす人手が少なくなっている事です。私の子供の頃は、子供会に3、40人いましたが、今は10人ぐらいに減っています。実際に山車を出せない区も既に出ています。ほとんどの区は、親戚や他の地区の方々に頼んで協力して頂き今のところ難を凌いでいます。

今の金津祭りは「こじき祭り」「祭りではなくイベント祭り」とか貶し言葉をちょくちょく耳にします。それは、街全体に配布される名簿に昔は区役員、子供、青壮年団の名前しか記載がなかったのがいつの間にか賄い方まで記載され、上り（現金収入）がないと祭りが出来ない状態にあるからと考えられます。

また、お神輿の上に人が乗ったり、各地区本陣前の子供踊りが最近ではアンコールとか声をかけたりして時間を考えない、小さい子供の事を考えられない事が増えてきています。それは何故かと考えますに、金津祭りの定義や目的、ルールがキチット決まっておらずあいまいなのです。そして、広く知られていない事です。

続ける為のヒントは過去を知れば解ると思います。歴史ある他地区の祭りを調べると正しいかどうかは立証されると思います。

金津祭りが出来た頃は御神輿の巡行しか行っておりませんでした。明治に入って山車巡行、戦後・震災後から子供踊りが始まり、自動車の発展と共に底抜けからトラックに、そして、前囃子（お囃子演奏）から前山車（和太鼓演奏）に変わりました。また、花山車は消えてなくなりましたし、子供お神輿巡行も減ってきています。この様に時代と共に変化して来たのが金津祭りです。

続けて行く為には、昔ながらの良い所は残して、決して無理をせず時代や身の丈にあった祭りをを行う事だと思います。変える事を恐れる事無く、続ける事が大事と考えます。

祭を続ける為には、もっと勉強して祭りの定義・目的・ルール等を更に明確にして区単位の事業じゃなく、街全体の事業にするべきです。要は、実行委員会（区長会・神社・市・市議会・観光協会・商工会・等の代表者）を立ち上げその下に金津祭り保存会（実行部隊）を編制し、更にその下に各委員会及び担当部所を作り、その委員会には祭りに携わる各種団体を置くべきです。例えば、{総務委員会（神社担当・露天商担当・巡行担当・人事担当）、本陣委員会、神社御神輿委員会、山車委員会（山車制作担当・進行担当・お囃子担当・電線上げ担当・舵担当・等）、前山車委員会（前山車制作担当・和太鼓奏者担当・等）、子供踊り委員会（曲及び踊り振付担当・踊り子担当・等）}。そして、当番区より不足部分に応援要請があれば会がその区にたいしてサポートをし、山車当番区が自らの区民だけでは祭りが出来ない場合はこの会が区名でなく会名で山車を出します。

みなさん、一緒に頑張って、金津祭りを金津の町を盛り上げて行きましょう。

<参考資料>

金津祭についての御意見を掲載させていただきます。

(1) 金津祭について（思い出） 浅田茂吉氏

明治 30 年 6 月「古社寺保存法」が公布され、北金津字春日山に鎮座する郷社大溝春日神社の社殿が修復され、それを機に、各区の区長や氏子代表が相談して 7 月 20 日を町内（当時の旧金津地区）神社の祭りを統一した祭礼日と決めました。

各区に、それぞれ氏神様・神社があり、各々春祭り・秋祭りがあり、ややこしかったが、統一した祭りの日を決めて一本化して、賑やかにやろうということになりました。その頃から山車や、囃子の車（そこのけ）の引き回しを始めました。

大東亜戦争（第二次世界大戦）戦時中や福井大震災の時は、お祭りどころではなかったので、休止しましたが、昭和 25 年復活して、また賑やかにやることになり、私のいる区・十日区が当番区となり、囃子の花車を引き、子供の神輿を町中かずいて廻りました。（人形山車は無）。当時、私は中学三年生でしたが、人数が足りないということで子供神輿にまわされたので小さい子供や小学生がぶら下がり、重たくて疲れ果てた記憶があります。



（写真は十日区が大鳥居前で記念撮影した）

その後、何年か後に（昭和 39 年）西部ブロック六区の山車当番区の順番を籤引きして決め直した。最初に一番籤に当たった脇出区は揉めたが、結局出すことになり、区民上げて頑張って責任を果たしたのは立派でした。

新しく誕生した春日区も是非参加したいとのことで最後の順番に加わった。

最後の当番区・坂ノ下区の次の七番目の昭和 63 年榊谷区長のもと初参加した。朝方は曇り空でしたが、ひどい雨だった事を覚えています。

中央区も新しく誕生した区で、昭和 58 年 6 月東部ブロック（4 区に）より初参加、榛の木原区は平成 9 年より参加し（南部ブロック 5 区になる）全部で 16 区となる。

祭礼の日にちの変更について

昭和 47 年になり、祭礼日の 7 月 20 日では盛夏の最中で暑いので疲れるし、食べ物も日持ちしないし、もっと気候の良くて、暑くない頃にしてほしいとの声が多く出て、当時の水口区長の故柴田捨善氏や神社役員さん達が、アンケートをとり、集計の結果、日にちを変えてほしいとの声

が多かったので、検討の末6月3日と変更、決定した。昭和47年より変更したが、平成7年までの24年間続くのでした。

しかし、梅雨の始まり頃で、雨ばかり降って困ったので、やはり7月20日が良いとのことで、平成8年より7月20日に戻りました。

その後「海の日」が制定され、7月20日が祝日となり、大変都合がよくなり喜んでいました、ところが、いつの間にか祝日法が改正され、祝日が第三月曜日に変更、土・日・祝日と三連休になるように仕組まれ、金津祭りの日にとって最悪となったのです。折しも当時は、不景気の真最中で、曜日の関係で一週間も会社勤めを休まなくなり皆さん大変困った。山車当番区の人達は特に困った。特に新富区の希望が強かった。

そこで平成16年は、7月19日の海の日（祝日）に山車を巡行することになりました。しかし、翌年も同じようなことが起きる事が予想され、毎年そうなることが心配されたので、いっそ第三日曜日に決定したらよいとの話が持ち上がり、（翌日は祝日で三連休となるので）金津地区区長会として、神社役員に提案したが賛否両論があり、なかなか決まらなかった。そこで、住民の皆さんの意見を聞き、再度、神社総会に提案して、7月の第三日曜日に決定し、回覧板やお知らせをして告知に努めました。

露天商組合にもお願いし、福井県観光協会にも役員でお願いに行きました。福井県広報課発行の福井県広報ニュースにも載せて貰いました。

神社宮司の提案で、第三日曜日の祭りの前日は、神官が山車や神輿のお祓いに廻ること、神社のお神輿は当日に巡行し、神官がお祓いに同行する。但し、神社の例祭（式典）は19日に行うことで決定した。神社としては21日迄の間、祭礼とする事になり、22日に提灯等の後片付け、「直らい会」（精算会）を行うことに決まりました。

山車(帰り山)のお迎え

各区内に神社神輿、山車が巡行してきたら、各区の区長・役員が区の入りにくまで迎えに行き、本陣前で子供達の踊りが済んで、自区を出るところまで送り出す風習・きまりとなっています。

また、夜になると、ブロック毎に、各区の区長を先頭に、青壮年団員達が、高はり提灯を掲げ、弓張り提灯を持って迎えに行く事になっています。

これは、昔からある美しい風習で、疲れて帰る山車の区民を応援し手伝う事と、提灯の明かりで、帰り道を照らして歩きやすくして安全を図る意味もあります。

金津の自分達は、見慣れていて当然のようにあまり感じませんが、他の町の人々の目には美しい風習だと感激して見られているようです。

また最近では帰りの山車の人形を照明をあてて明るく照らすようになりましたが、いろんな反対の意見もあるようですが、私は結構だと思います。

(2) 稲田信夫氏のことば (六日区)

① 本陣と本陣飾り物の関係

当初は本陣はあっても飾り物が無かったと聞きましたが、どういったいきさつがありましたか？

戦時中（昭和17年～20年）の頃は全国挙げての戦争と国難との戦いでした。お寺の釣鐘から蚊帳のつり手金具（真鍮）まで提出して、後は何も出すものがない苦しい生活でした。こんな時期と織細後多くの遺産を消失した事に起因しての、出来ない理由ではないでしょうか。

② 戦後は前囃子の太鼓が無く、山車のお囃子のみとの事でしたが、当時の情景を教えてください。

昭和9年の山当番の年でした。当時小学3年生でした。囃子方に出場しました。太鼓を叩く合間に「イーヤー」と言うかん高い声で元気なところを出しました。これが非常に人気があり、喜ばれた記憶がありました。遠くから聞こえてくる笛、太鼓と三味線古風な音色がながれてくると、家から飛び出し声援したものでした。渡行する山車には似合った曲だと思います。昭和25年長い間休んでいた祭りの復活だ。併し、山車がない、人形が出来ない、こんな時何を考えたか、仮装行列（桃太郎）に始まり、青年団の太鼓叩き、子供御輿など繰り出し賑やかに行ってきました。29年によく本山車を新調し再復活したのです。ところが副産物の前囃子の太鼓、御輿、踊り子なしですするわけにも行かず、盛沢山な出し物で渡行することになりました。これが現在の姿です。

③ 本陣飾り物を作るときのルールを教えてください。

ルールには数多くはないですが、いくつかの集合体に分ける材料は、台所品、ガラス製品、金物類、塗り物類、陶磁器類、単品同一種、その他、1個の品物は切ったり、加工、または分解して使用してはならない。元の製品に戻すことが出来るような製作をすること、骨組み土台をつくり、これに接着剤で貼り付ける事は可とする。

④ 昭和或いは平成の時代で金津神社の宮司が馬に乗ってお祓いをしたといわれていますが、記憶にある年代を教えてください。

私の知る昭和・平成時代には記憶にない。わかりません。

⑤ 本陣飾り物を作る楽しさと、悩みを教えてください。

製作期間中は秘で行い口外せず、開幕と同時に、または初めて見るとき「アーッ」と驚きの声、見る人と製作した人、互いに感嘆し合える雰囲気最高の喜びです。悩み事というよりは後継者作りでしょう。

⑥ 今後の方向性と展望、そして期待すること

このところ十数年本陣作りに興味を持ち過ごしてきましたが、とにかく物作りが好きなんです。本陣飾り物は全国でも数少ない珍しい行事です。年々拡大盛況して行くことを願います。造物趣向種全に書いてあるように、人が集まればまた賑やかになる。それには飾り物をして人を呼ぶ、これも一つの手段也、益々発展するよう願います。

(3) 金津祭囃子保存会 会長 佐々木誠三氏の話

金津祭りは金津地区民にとってなくてはならないものであります。また、金津祭りの山車巡行に当たってはお囃子も必要不可欠なものです。

そのお囃子を支援活動する事を目的として、山車のお囃子は金津の人で守る。また、山車当番区の方で三味線や篠笛の経験や興味がある方、特に青壮年団に指導させて頂きまして、伝統を守っていく事。そして、子供たちに太鼓を通して郷土愛を育てる事業を行おうと、金津三弦会（三味線方）と、夕笛会（篠笛方）の有志にて平成13年に金津祭囃子保存会が発足いたしました。

平成16年より金津小学校より依頼があればお囃子指導や講演等々の活動も行っております。

金津祭囃子保存会を発会した時に感じましたのが、金津祭りに対して何も知らないと言う事に気づき調査を行い、総社金津神社や金津祭り、特に山車に対する資料集めを始めました。

区長会や総社金津神社氏子の皆様の協力を頂き、歴史書を読み、諸先輩から話を聞かせて頂いたり、山車の写真を集めさせて頂き、何年にどの地区がどのような山車を出したのか大分わかりました。しかし、解れば解る程疑問も増えていき、未だに解らない事が数多くあります。

私が金津祭りの好きな所は、お祭りを通して町の人たちの心が一つに成れると言う事です。そして、祭りでコミュニティが出来ているというところです。

普段から、若い人とお年寄りが一緒に何かをすとか、他の地区の者同士が話し合いをする事はあまりありませんが、祭りの事となると、老人から若い人がしきたりを教わって作業をしたり、他の区の人と話が盛り上がります。そして、お祭り当日は、子供会が山車の太鼓や、踊りを披露して、青壮年団員がお神輿を担ぎ、太鼓を叩いて、婦人会が食事の準備をし、老人会が本陣の留守番等をしています、山番でなくても子供お神輿を担いだり、山車の綱を曳いたりしています。また、18の区が本陣を作っています。また、金津人は太鼓やお囃子が聞こえて来ると家から出て来て、本陣の前に集まって来ます。踊っている子供を見て「あの子はどこどこさん家の子や？」とか、見に来ている爺様に「かたいけの」とか挨拶して、金津のみんなが参加・協力し合い町中の心が一つに成って十二分なコミュニティがとれ良いお祭りが出来ています。

それは町中のみんなが楽しみにしているから出来るのだと思います。これは立派な文化です。この様な祭りが、昔から長く続いている事が、大変素晴らしい事ですので、子供達に伝承して永遠に残していかなければなりません

祭りとは、街の豊かさの象徴であります。

豊かさとは、歴史や文化があり、それらを担う人々が数多く居られる事だと思います。祭りのすたる街は町もすたっています。

ここで抱える問題点を解決して、豊かな街の祭りを永遠に続けて行かなければ成りません。問題点の第1は「少子化・過疎化問題」、第2は「あがり（金銭）問題」、第3は「祭りの趣旨・

目的」です。

祭を動かす人手が少なくなっている事です。私の子供の頃は、子供会に3、40人いましたが、今は10人ぐらいに減っています。実際に山車を出せない区も既に出ています。ほとんどの区は、親戚や他の地区の方々に頼んで協力して頂き今のところ難を凌いでいます。

今の金津祭りは「こじき祭り」「祭りではなくイベント祭り」とか貶し言葉をちよくちよく耳にします。それは、街全体に配布される名簿に昔は区役員、子供、青壮年団の名前しか記載がなかったのがいつの間にか賄い方まで記載され、上り（現金収入）がないと祭りが出来ない状態にあるからと考えられます。

また、お神輿の上に人が乗ったり、各地区本陣前の子供踊りが最近ではアンコールとか声をかけたりして時間を考えない、小さい子供の事を考えられない事が増えてきています。それは何故かと考えますに、金津祭りの定義や目的、ルールがキチット決まっておらずあいまいなのです。そして、広く知られていない事です。

続ける為のヒントは過去を知れば解ると思います。歴史ある他地区の祭りを調べると正しいかどうかは立証されると思います。

金津祭りが出来た頃は御神輿の巡行しか行っておりませんでした。明治に入って山車巡行、戦後・震災後から子供踊りが始まり、自動車の発展と共に底抜けからトラックに、そして、前囃子（お囃子演奏）から前山車（和太鼓演奏）に変わりました。また、花山車は消えてなくなりましたし、子供お神輿巡行も減ってきています。この様に時代と共に変化して来たのが金津祭りです。

続けて行く為には、昔ながらの良い所は残して、決して無理をせず時代や身の丈にあった祭りを行う事だと思います。変える事を恐れる事無く、続ける事が大事と考えます。

祭を続ける為には、もっと勉強して祭りの定義・目的・ルール等を更に明確にして区単位の事業じゃなく、街全体の事業にすべきです。要は、実行委員会（区長会・神社・市・市議会・観光協会・商工会・等の代表者）を立ち上げその下に金津祭り保存会（実行部隊）を編制し、更にその下に各委員会及び担当部所を作り、その委員会には祭りに携わる各種団体を置くべきです。例えば、{総務委員会（神社担当・露天商担当・巡行担当・人事担当）、本陣委員会、神社御神輿委員会、山車委員会（山車制作担当・進行担当・お囃子担当・電線上げ担当・舵担当・等）、前山車委員会（前山車制作担当・和太鼓奏者担当・等）、子供踊り委員会（曲及び踊り振付担当・踊り子担当・等）}。そして、当番区より不足部分に応援要請があれば会がその区にたいしてサポートをし、山車当番区が自らの区民だけでは祭りが出来ない場合はこの会が区名でなく会名で山車を出します。

みなさん、一緒に頑張って、金津祭りを金津の町を盛り上げて行きましょう。

(4) 金津祭囃子保存会山車太鼓指導 堀田あけみさんの話

① お囃子の指導を通じて子供たちに伝えたいことは何ですか？

山車に乗るということは神様の使いだということ。祭は楽しいものであり、おごそかなものであるということ。金津祭の伝統と文化の中にある「礼」を知ってほしい。

② 金津祭の好きなところは何ですか？

区民みんなが（特に当番区の区は）年寄り、若者、子供、男女が一つになって区を誇りに思い、参加し、終わった後の充実感をみんなと一緒に味わうところ。

③ 金津祭の山車の囃子方からみた望む点がありますか？

祭の主役は本山の太鼓の子供達だと思っています。神様の使いとして本山に乗り、各地区の本陣（杜）を回り清める役目だと思う。しかし、最近では一番目立たないのも本山の子供達です。前囃子の太鼓や踊りの子供達は、本陣の前で太鼓や踊りを披露するのでどうしても目立ちます。でも本山の子供達は本陣～本陣の間はずっと太鼓をたたいていますが、本陣の前では何もしません。また市民の方も本山の中まで覗いてまで誰がたたっているか見ません。5月から一生懸命練習してきている子供達も前囃子の人や踊りの子供達と一緒になので、なんとか本山の子供達にも拍手を浴びるような機会を作ってあげたいと思います。

前囃子と山車が近いと、前囃子の太鼓の音に本山車の太鼓や子供達の掛け声が消されてしまうこともしばしばあります。もう少し前車と本山車の間をあけて巡行できればと思います。

④ 金津祭の将来について感じていることをお聞かせください。

本山に乗る祭囃子の人、山車当番区の区長、役員の方に金津祭の歴史、山車の諸々の取り決め、飾付の意味を理解してもらうために、祭の始まる前に集まって勉強してもらい、正しい伝統文化の継承に勤めたらどうでしょうか。

自分の区だけでやりくりするのは、これからどんどん困難になるでしょうから、小学校にお願いして参加希望の子供達にどんどんお祭に参加してもらい、またその親も一緒に祭のお手伝いをしてもらって、人員の確保を考えたらどうか。

個人の祝儀を当てにして行う祭には、現在の経済では非常に困難なため、個人祝儀は止め、区単位での祝儀の実として運営していく方法を考えてほしい。

⑤ その他お気づきの点について何かありますか？

金津祭には前車、本山、子供踊り、本陣飾りと4つ揃っている祭は全国にもあまりないと思います。また、夜の帰り山は提灯をかざして何とも言えない荘厳さがあります。是非これをPRして、一つの観光の目玉にできないでしょうか。

(5) 金龍太鼓と金津祭について

金龍太鼓保存会 代表 天田 将六、チームリーダー 原 敏夫

① 金龍太鼓の由来

旧金津町千束（現在のあわら市千束）の山間、通称「榎ヶ谷」に広さ7～8アールもある大きな堤がありました。そこは三方が松と雑木に囲まれその緑が深い水底に沈んで静まり返っています。

この堤の主は金鱗の大蛇でした。雨上がりの日など、堤のほとりで長い艶やかな髪を櫛ですぐっている妙齡な美女が時折みられ村人たちはこの美女を金龍の化身とあがめ、祠を建てて奉ってきました。これが今に残る「金龍神社」です。

金龍太鼓はこの金龍に祀る奉納太鼓を受け継いだもので、水神金龍への畏敬と信仰の心が込められています。

② 金龍太鼓の発足について（初代金龍太鼓 昭和38年～53年）

昭和38年天田将六が中心となり、地域の活性化と金津祭への協力、参加を主な目的として当時の金津町水口区（現在のあわら市春宮2丁目）区民7名で発足しました。

発足当時のメンバーは「天田将六」「正山秀志」「永岡幸一」「庄山章信」「五十嵐等」「浅田興治」「中村和夫」の7名です。



昭和38年数か月の猛練習ののち、旧春日神社神殿横の催事ステージにて地元水口区区民はもとより広く旧金津町町民に腕前を披露すべく、春日神社への奉納太鼓として「金龍太鼓」の初舞台を成功させました。この初舞台を機に、広く旧金津町内外に金龍太鼓の名が知れ渡ることとなりました。

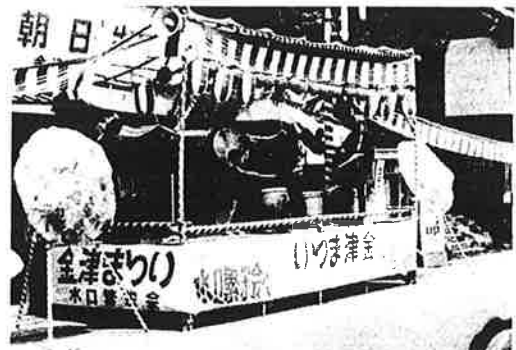
それ以後、県内はもとより遠くは関西、中部地方等遠方へも出かけて腕前を披露して行きました。

その後、初代金龍太鼓は15年程度の活動期間を経て、諸事情により活動を休止することとなりました。

③ 2代目金龍太鼓について（昭和55年～60年）

数年の活動休止期間を経て、昭和55年に天田将六が親方として水口区内外よりメンバーを募り「2代目金龍太鼓」を7名で発足させました。

メンバーは親方に「天田将六」がつき、「櫻井浩行（水口区）」「小林孝男（新町区）」「前田幸雄（新町区）」「島川孝訓（上八日区）」



「島川浩俊（上八日区）」「籠島（旧上野区）」の合計7名です。

当チーム発足当時は第1次太鼓ブームが到来した直後で、福井県内の様々な太鼓コンテストに出場して、個人、団体ともに優秀な成績をあげて行きました。

当チームは5年弱と短期間でチームを解散いたしました。解散後それぞれが各地区に帰り、金津祭を中心とした太鼓チーム結成に中心的な役割を果たして行きました。

④ 現在の金龍太鼓について（3代目金龍太鼓 昭和60年～現在）

昭和60年水口区の祭番時に前囃子の太鼓チームとして結成されたのが現在の金龍太鼓です。当初は水口区区民7名での発足でしたが、28年の間に人員の入替え等もあり、平成25年8月現在水口区を中心に広く旧金津町内よりの人員14名での構成となっています。

メンバーは「原敏夫」をチームリーダーにして以下「小林孝男」「櫻井雅康」「櫻井浩行」「細田富士雄」「墨谷隆幸」「笹原博之」「石川裕峰」「加野悟」「小阪真介」「森嗣一郎」「海老田昭憲」「山白洋平」「伊藤慧」の合計14名です。

⑤ 金龍太鼓と金津祭山車巡行との関わりについて

初代金龍太鼓が金津祭の前囃子として初参加したのは昭和44年の祭番です。

当時旧金津町内には曲太鼓チームは「金龍太鼓」と「市姫太鼓」の2チームしかなく、前囃子の主流はまだ七調目（しっちょめ・ひっちょめ）でした。

続く昭和47年の水口区祭番では天田将六は水口区の子供たちに曲太鼓を教えて、小学6年生と5年生の子供だけに前囃子の太鼓を任せ、天田将六が笛をつとめて巡行させました。

当時の前囃子のメンバーは水口区の以下の小学生5名でした。

小学6年生 3名 櫻井、広崎、高瀬

小学5年生 2名 五十嵐、堀

上記の通り金龍太鼓が曲太鼓で前囃子をつとめてきましたが、当時はまだ本陣前での太鼓の披露は行っていませんでした。

その後、水口区区民を中心とした金龍太鼓の活動休止の関係もあり、水口区としての前囃子の曲太鼓での披露は数回途絶えてしまいました。（その数回の前囃子は七調目（しっちょめ・ひっちょめ）でした。）

昭和60年の水口区祭番時に結成された「3代目金龍太鼓」が曲太鼓での前囃子を復活させ、祭り当日町内を曲太鼓で巡行しました。そして、各区本陣前では八木節を歌いメンバーの2名が銭太鼓を披露して回りました。

続く平成元年の祭番では「3代目金龍太鼓」が前囃子を巡行して回り、各区本陣前では曲太鼓の揃い打ちを披露いたしました。金龍太鼓での各本陣前での曲太鼓の揃い打ち



の披露は平成元年の祭番が最初でした。そして、平成5年の祭番では金龍太鼓として当時レパートリーとして持っていた5～6曲を引っ提げて祭りに臨み、各区で違った曲目を披露して回りました。

その後は金龍太鼓が主となり祭番の都度水口区青壮年団より新しく前囃子の太鼓の希望者を募り祭番の前囃子に臨み、各区本陣前では必ず曲太鼓の揃い打ちの披露を行っています。

今年は金龍太鼓誕生51年目となります。初代より現在の3代目まで歴史と伝統を受け継いできましたが、今後も水口区祭番には「金龍太鼓」が前囃子を務めて参ります。そのためには、より一層努力を重ね常に技術の向上に努めて行かねばならないと考えております。

⑥ 金龍太鼓と金津祭とのこれからの関わり方について

現在金龍太鼓では祭番地区より前囃子太鼓の指導依頼を受けて、祭番地区の若い衆に前囃子の太鼓指導を行っています。

指導内容は、「花車に乗っての町廻りで叩く太鼓指導」と「本陣前で披露する揃い打ち」の2種類で、「三つ打ち」というリズムを基本にして指導しています。また、太鼓経験者がいる場合は「十四日」という少し難しいリズムも指導します。

また、平成20年、24年と25年には「越前金津金龍太鼓夜宴」と銘打って前祭りの日に金津神社境内において太鼓の舞台イベントを開催しました。このイベントは金龍太鼓の活動披露とともに、金津祭の祭番で前囃子太鼓を披露する若い衆にお披露目の場を提供したいという思いから助成金を活用して資金手当てを行いながら開催いたしました。

将来的には、この「夜宴」を金津祭に関わる太鼓団体や祭番の子供踊りのお披露目の場にしていければと考えております。

金龍太鼓はこれからも金津祭には積極的にかかわって行き、伝統ある祭りの保存、発展に貢献して行きたいと考えております。

(6) 六市太鼓について

六市太鼓 代表 田中 隆之

六市太鼓の由来は、私達の親の世代になる六日区民伸友会によって昭和41年に結成されました。六日区には、昔、市姫神社が祀られており『市姫太鼓』という名で保存会が作られました。

その当時の活動は金津祭りが中心で、現在の金津祭りでの前囃子（前屋台）にて伏せ太鼓（長胴太鼓）等の打ち込みは六日区の市姫太鼓が最初に行いました。現在ではどの地区も和太鼓をする風習になりました。

その後、昭和60年代から平成にかけて、一世代若いメンバーで再結成して20代のメンバーは太鼓の技術を向上させて色々なコンテストに参加し、織田町の「響けオタイコヒルズコンテスト」では織田町長賞を頂く成績を残しました。

現在では、我々の子供達にこの保存会を伝承して行く為に、六日区の六と市姫太鼓の市をとって六市太鼓と命名し六日区子供会を中心に日々練習に励み頑張っています。メンバーは大人の指導者3名と小学生から高校生の13名で毎月2・3回練習を行っています。ボランティアや地元の祭りなどの出番に向かって活動をしています。

将来、この子供達が六日区の太鼓を受け継いで、代々伝えてもらう事が私達の目標です。

山車写真集

(明治～平成 25 年)

山車写真 目次

明治～昭和の山車写真	33
昭和 9-11 年 //	34
昭和 12-23 年 //	35
昭和 25-27 年 //	36
昭和 28-30 年 //	37
昭和 31-33 年 //	38
昭和 34-36 年 //	39
昭和 37-39 年 //	40
昭和 40-42 年 //	41
昭和 43-45 年 //	42
昭和 46-48 年 //	43
昭和 49-51 年 //	44
昭和 52-54 年 //	45
昭和 55-57 年 //	46
昭和 58-60 年 //	47
昭和 61-63 年 //	48
平成元- 3 年 //	49
平成 4- 6 年 //	50
平成 7- 9 年 //	51
平成 10-12 年 //	52
平成 13-15 年 //	53
平成 16-18 年 //	54
平成 19-21 年 //	55
平成 22-24 年 //	56
平成 25 年 //	57

お願い

昭和 50 年代以前の中に、当番区が分かっていても山車の写真がない所があります。

また、古い写真の中に山車の写真がありましたら、下記に連絡下さい。

または、2 基以上の山車と一緒に写っているものとか、馬に乗った宮司の写真も求めています。

なお、お借りした写真はデータ化した後にご返却致します。

<連絡先>

住 所：〒919-0621 あわら市市姫二丁目 29-5

氏 名：佐々木 誠三

T E L：(0776) 73-0182 （携帯：090-3767-4653）

F A X：(0776) 73-0182

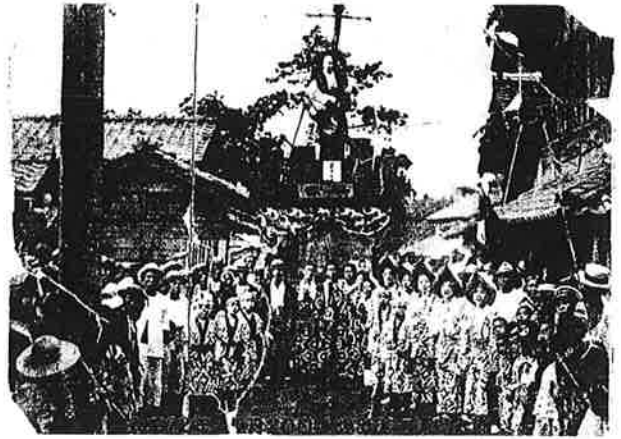
Email：barber@fsci.ne.jp

明治～昭和の山車写真



明治 新区

明治(年代不明) 新



大正 12 年 脇出



昭和(年代不明) 十日



昭和(年代不明) 十日



昭和(年代不明) 古区



昭和(年代不明) 古区

昭和9～11年



昭和9年7月20日 赤田区 毛利家

昭和9年 六日



昭和9年7月20日 赤田区 毛利家

昭和9年 六日



昭和9年7月20日 脇田区 木村重成

昭和9年 脇田



昭和10年7月20日 水口区 木下藤吉郎

昭和10年 水口



昭和11年7月20日 下八田区 関新太光彦

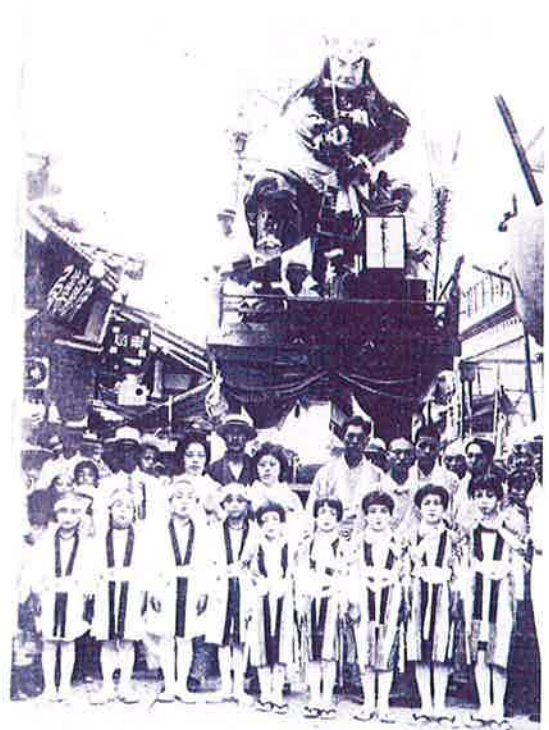
昭和11年 下八田

昭和12～23年



昭和12年7月20日 水口区 五郎崎祭

昭和12年 水口



昭和12年7月20日 水口区 五郎崎祭

昭和12年 六日



昭和13年 新



紀元二千六百年祭

昭和13年 六日



昭和23年 上八日

昭和23年金津祭 戦後、震災後のため仮装行列

昭和 25 年 7 月 20 日



六日



十日

昭和 26 年 7 月 20 日



水口

新



下八日・八日下

昭和 27 年 7 月 20 日

天王

東

昭和 28 年 7 月 20 日



古



八日

新富・旭

昭和 29 年 7 月 20 日



六日



坂ノ下

水口

昭和 30 年 7 月 20 日



天王



新



上八日

昭和31年7月20日



新富・旭

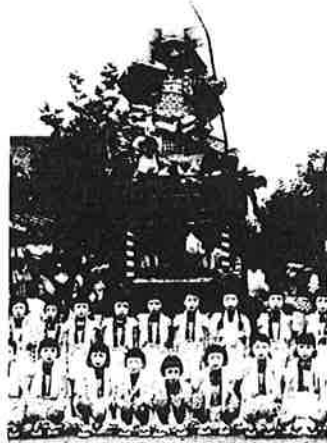


東

昭和32年7月20日



水口



古

昭和33年7月20日



天王

昭和33年7月20日 水口區 藤西八郎為親

六日

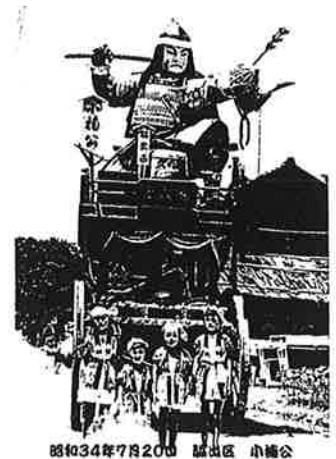
昭和34年7月20日



新富



新



脇出

昭和35年7月20日



水口



東

上八日

昭和36年7月20日



天王

古

下八日

昭和37年7月20日



六日



坂ノ下

昭和38年7月20日



水口



十日

新

昭和39年7月20日



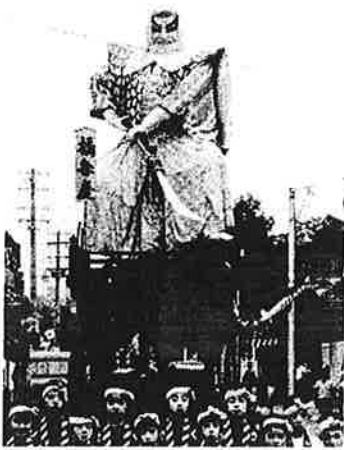
天王



東

脇出

昭和40年7月20日



新富



古



八日

昭和41年7月20日



水口

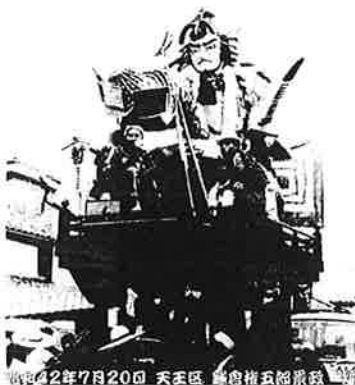


六日

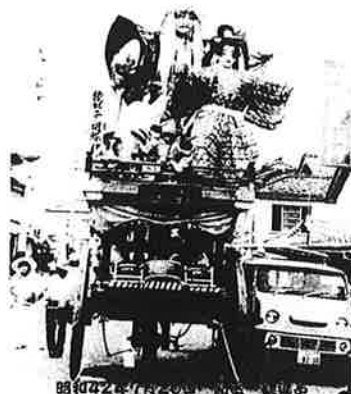


上八日

昭和42年7月20日



天王



新



十日

昭和43年7月20日



新富



東



下八日

昭和44年7月20日



水口



古



坂ノ下

昭和45年7月20日



天王



脇出

六区

昭和46年7月20日



新富



新



八日

昭和47年6月3日



水口



上八日

昭和48年6月3日



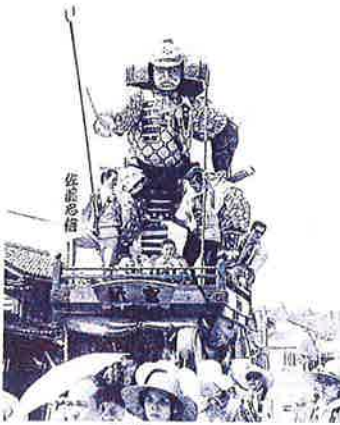
天王



古

十日

昭和49年6月3日



新富



六日

下八日

昭和50年6月3日



水口

新

坂ノ下

昭和51年6月3日



天王



東



脇出

昭和52年6月3日



新富



古



八日

昭和53年6月3日



六日



上八日

昭和54年6月3日



天王

新



十日

昭和55年6月3日



新富



東



下八日

昭和56年6月3日



水口



古



坂ノ下

昭和57年6月3日



天王



六日



脇出

昭和58年6月3日



昭和58年6月3日 中央区 新富地区
中央



新



八日

昭和59年6月3日



新富



東



上八日

昭和60年6月3日



水口



古



十日区

昭和 61 年 6 月 3 日



天王



六日



下八日

昭和 62 年 6 月 3 日



中央



新



坂ノ下

昭和 63 年 6 月 3 日



新富



東



春日

平成元年 6 月 3 日



水口



古



脇出

平成 2 年 6 月 3 日



天王



六日



八日

平成 3 年 6 月 3 日



中央



新



上八日

平成4年6月3日



新富



東



十日

平成5年6月3日



水口



古



下八日

平成6年6月3日



天王



六日



坂ノ下

平成7年6月3日



中央



新



春日

平成8年7月20日



新富



東



脇出

平成9年7月20日



水口



榛ノ木原



八日

平成10年7月20日



天王



古



上八日

平成11年7月20日



中央



六日



十日

平成12年7月20日



新富



新



下八日

平成13年7月20日



水口



東



坂ノ下

平成14年7月20日



天王



榛ノ木原



春日

平成15年7月20日



中央



古



脇出

平成 16 年 7 月 19 日



新富



六日

八日 不参加

平成 17 年 7 月 17 日



水口



新



上八日

平成 18 年 7 月 16 日



天王



東



十日

平成 19 年 7 月 15 日



中央



榛ノ木原



下八日

平成 20 年 7 月 20 日



新富



古



坂ノ下

平成 21 年 7 月 19 日



水口



六日



春日

平成 22 年 7 月 18 日



天王



新



脇出

平成 23 年 7 月 17 日



中央



東

八日

平成 24 年 7 月 15 日



新富



榛ノ木原



上八日

平成 25 年 7 月 14 日



水口



古



十日

金津祭山車人形と御囃子一覧表

年 代	東部ブロック		橋南ブロック		西部ブロック		神社御神輿
	区名	山車人形	区名	山車人形	区名	山車人形	区名
明治 年 7月20日			新	不明			
大正12年 7月20日					脇出	浦島太郎	
昭和元年 7月20日	水口		新		十日		
昭和 2年 7月20日	水口		古				
昭和 3年 7月20日	水口		六日	佐々木盛常			
昭和 4年 7月20日	水口		新				
昭和 5年 7月20日	水口		古		八日	井上大九郎	
昭和 6年 7月20日	水口		六日	織田信長			
昭和 7年 7月20日	水口		新				
昭和 8年 7月20日	水口		古				
昭和 9年 7月20日	水口		六日	毛利玄達	脇出	木村重成	
昭和10年 7月20日	水口	木下藤吉郎	新				
昭和11年 7月20日	水口		古		下八日	間新六光風	
昭和12年 7月20日	水口	五郎時宗	六日	梶原源太景季			
昭和13年 7月20日	水口		新	今川義元			
昭和14年 7月20日	水口		古				
昭和15年 7月20日	水口		六日				
昭和16年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和17年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和18年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和19年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和20年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和21年 7月20日				第2次世界大戦により中止			
昭和22年 7月20日							
昭和23年 7月20日					上八日	仮装行列	
昭和24年 7月20日				福井大震災により中止			
昭和25年 7月20日				祭は行ったが山車巡行はできませんでした。			
昭和26年 7月20日	水口		六日	仮装行列(桃太郎)	十日	花車	
昭和27年 7月20日	天王	初参加?	新	平敦盛初陣	下八日・八日	大石主税良金	稲荷山
昭和28年 7月20日	新富・旭	初参加	東	初参加?			旭
昭和29年 7月20日	水口		古	武田信玄	八日		榛ノ木原
昭和30年 7月20日	天王	敦盛の初陣	六日	橋弁慶	坂ノ下	後藤又兵衛	稲荷山
昭和31年 7月20日	新富・旭	間新六	新	猿飛佐助	上八日	梶原源太景季	旭
昭和32年 7月20日	水口	佐々木四郎高綱	東	スーパーマン			榛ノ木原
昭和33年 7月20日	天王		古	鎮西八郎為朝			稲荷山
昭和34年 7月20日	新富	鎌倉権五郎景政 暫く	六日	鎮西八郎為朝が捨丸琉球魔王を討つ場			旭
昭和35年 7月20日	水口		新	仁田四郎	脇出	小楠公	榛ノ木原
昭和36年 7月20日	天王		東	三番叟	上八日	母里太兵衛と名槍「日本号」	稲荷山
昭和37年 7月20日	新富	黒田節 母里太兵衛	古		下八日	狸々	旭
			六日	少年彦左 一番乗り	坂ノ下	車引桜丸	榛ノ木原

昭和38年 7月20日	水口	宮本武蔵	新		十日	変幻三日月丸	稲荷山
昭和39年 7月20日	天王	松の廊下	東	小楠公	脇出		旭
昭和40年 7月20日	新富	橋弁慶	古		八日	徳川家康	榛ノ木原
昭和41年 7月20日	水口	三井寺の弁慶	六日	勸進帳	上八日	熊谷陣屋	稲荷山
昭和42年 7月20日	天王	鎌倉権五郎景政 暫	新	鏡獅子	十日	平井保昌	旭
昭和43年 7月20日	新富	坂本竜馬	東	鏡獅子	下八日	那須与一	榛ノ木原
昭和44年 7月20日	水口	富樫左エ門	古	長尾影虎	坂ノ下	熊谷次郎直実	稲荷山
昭和45年 7月20日	天王	花咲かじいさん	六日	鎌倉権五郎景政 暫	脇出	大石内蔵助	旭
昭和46年 7月20日	新富	源義経	新	暫く	八日	柳生又右衛門	榛ノ木原
昭和47年 6月 3日	水口		東	勸進帳	上八日	竹拔五郎	稲荷山
昭和48年 6月 3日	天王	義経の八艘飛び	古		十日		旭
昭和49年 6月 3日	新富	佐藤忠信	六日	鏡獅子	下八日	武田信玄	榛ノ木原
昭和50年 6月 3日	水口		新	暫く	坂ノ下		稲荷山
昭和51年 6月 3日	天王	源義経 鴨越えの場	東	富樫左エ門	脇出	黒田節 母里太郎兵衛	旭
昭和52年 6月 3日	新富	平知盛	古	土蜘蛛の精	八日	加藤清正	榛ノ木原
昭和53年 6月 3日	水口		六日	狐忠信	上八日	武蔵坊弁慶	稲荷山
昭和54年 6月 3日	天王	大伴黒主	新		十日	武蔵坊弁慶	旭
昭和55年 6月 3日	新富	木下藤吉郎	東	平知盛	下八日	楠木正行	榛ノ木原
昭和56年 6月 3日	水口	武田信玄	古	橋弁慶	坂ノ下	八幡太郎義家	稲荷山
昭和57年 6月 3日	天王	黒田節 母里太兵衛	六日	牛若丸と弁慶	脇出	竹拔五郎	旭
昭和58年 6月 3日	中央	初参加 富樫左エ門	新	源	八日	徳川家康	榛ノ木原
昭和59年 6月 3日	新富	鎮西八郎為朝	東	弁慶の引きつり鐘	上八日	武蔵坊弁慶	稲荷山
昭和60年 6月 3日	水口	茨木童子	古	勸進帳弁慶	十日	遠山金四郎	旭
昭和61年 6月 3日	天王	鎌倉権五郎景政	六日	桃太郎鬼退治	下八日	加藤清正	榛ノ木原
昭和62年 6月 3日	中央	弁慶	新	武蔵と小次郎	坂ノ下	独眼竜政宗	稲荷山
昭和63年 6月 3日	新富	武田信玄	東	上杉謙信	春日	初参加 鏡獅子	旭
平成元年 6月 3日	水口	鎌倉権五郎景政 暫	古	曾我五郎時致	脇出	新田義貞公出陣	榛ノ木原
平成 2年 6月 3日	天王	上杉謙信	六日	連獅子	八日	鎮西八郎為朝	稲荷山
平成 3年 6月 3日	中央	甕割り柴田	新	塚原ト伝と宮本武蔵	上八日	那須与一	旭
平成 4年 6月 3日	新富	織田信長	東	那須与一	十日	弁慶の立往生	榛ノ木原
平成 5年 6月 3日	水口	勸進帳	古	真田幸村	下八日	日本武尊の熊襲退治	稲荷山
平成 6年 6月 3日	天王	源義経	六日	橋弁慶	坂ノ下	鎌倉権五郎景政 暫く	旭
平成 7年 6月 3日	中央	勸進帳	新	武田信玄	春日	溝江長氏	榛ノ木原
平成 8年 7月20日	新富	朝倉義景公	東	楠木正行	脇出	豊臣秀吉	稲荷山
平成 9年 7月20日	水口	毛利元就	榛ノ木原	初参加 こども鏡獅子	八日	柴田勝家	旭
平成10年 7月20日	天王	鎌倉権五郎景政	古	竹拔五郎	上八日	織田信長	榛ノ木原
平成11年 7月20日	中央	鐘馗	六日	真田幸村	十日	武田信玄	稲荷山
平成12年 7月20日	新富	徳川家康	新	上杉謙信	下八日	羅生門の鬼女	旭
平成13年 7月20日	水口	鏡獅子	東	北条時宗見参	坂ノ下	渡辺綱	
山車獅子(行き・戻り・帰り)		紅葉狩り・深川くずし・四丁目		あずま八景・四丁目		坂ノ下獅子・馬鹿囃子	
平成14年 7月20日	天王	弁慶の引摺り鐘	榛ノ木原	織田信長	春日	前田利家公	稲荷山
		勸進帳・四丁目		親子獅子・龍鞠・四丁目		岸の柳・深川くずし・四丁目	
平成15年 7月20日	中央	鏡獅子	古	畑六郎左衛門時能	脇出	宮本武蔵	旭
		俄獅子・四丁目		親子獅子・龍鞠・四丁目		岸の柳・深川くずし・四丁目	

平成16年 7月19日	新富	源義経 鷲娘・こころ・四丁目	六日	柴田勝家 俄獅子・四丁目	八日	不参加	東
平成17年 7月17日	水口	武蔵坊弁慶 勸進帳・四丁目	新	鏡獅子 岸の柳・正札・四丁目	上八日	源義経	稲荷山
平成18年 7月16日	天王	竹抜き五郎 五郎・四丁目	東	真田幸村 あずま八景・四丁目	十日	柴田勝家と六角軍兵 越後獅子・四丁目	古
平成19年 7月15日	中央	勸進帳の弁慶 俄獅子・四丁目	榛ノ木原	暫く 鎌倉権五郎景政 末広狩り・四丁目	下八日	結城秀康 岸の柳・深川くずし・四丁目	旭
平成20年 7月20日	新富	上杉謙信 末広狩り・四丁目	古	溝江長氏公 岸の柳・正札・四丁目	坂ノ下	八幡太郎義家 坂ノ下獅子・馬鹿囃子	稲荷山
平成21年 7月19日	水口	源九朗義経 勸進帳・四丁目	六日	織田信長 親子獅子・月の巻・四丁目	春日	溝江長晴公 越後獅子・四丁目	古
平成22年 7月18日	天王	武田信玄 山王の・月の巻・四丁目	新	新田義貞 屋台獅子・四丁目	脇出	柴田勝家 親子獅子・稲荷祭・四丁目	旭
平成23年 7月17日	中央	浅井長政 俄獅子・四丁目	東	鏡獅子 あずま八景・四丁目	八日	不参加	稲荷山
平成24年 7月15日	新富	那須与一 末広狩り・四丁目	榛ノ木原	勸進帳 勸進帳・四丁目	上八日	前田慶次 俄獅子・四丁目	旭
平成25年 7月14日	水口	上杉謙信 親子獅子・稲荷祭・四丁目	古	真田幸村 俄獅子・四丁目	十日	佐々木小次郎 越後獅子・四丁目	新

→ 九四

→ 古

本陣飾り物写真集

(平成 10～25 年)

本陣飾り物写真 目次

平成 10 年度本陣飾り物写真		63
平成 11 年度	//	64
平成 12 年度	//	65
平成 13 年度	//	66
平成 14 年度	//	67
平成 15 年度	//	68
平成 16 年度	//	69
平成 17 年度	//	70
平成 18 年度	//	71
平成 19 年度	//	72
平成 20 年度	//	73
平成 21 年度	//	74
平成 22 年度	//	75
平成 23 年度	//	76
平成 24 年度	//	77
平成 25 年度	//	78

平成10年度 本陣飾り物写真



新



東



新富



六日



古



旭



春日



脇出



上八日



稲荷山



坂ノ下



下八日



八日



天王



十日



榛ノ木原



中央



水口

平成 11 年度本陣飾り物写真



新富



六日



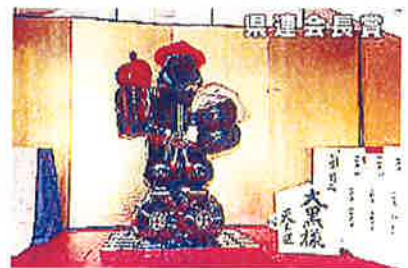
旭



新



春日



天王



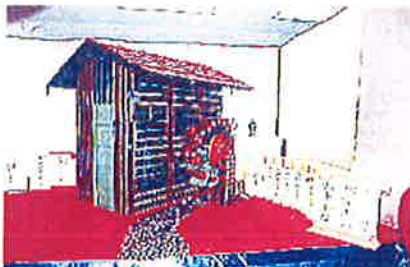
古



十日



八日



下八日



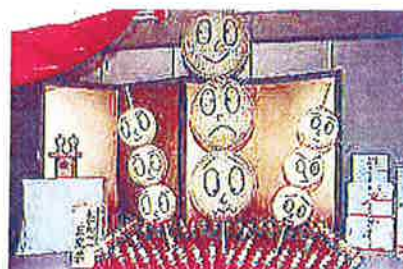
坂ノ下



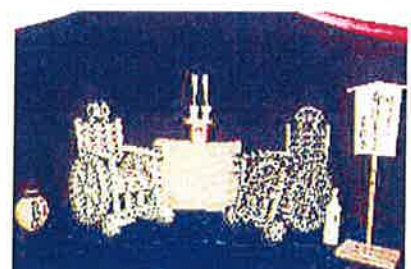
稲荷山



下八日



脇出



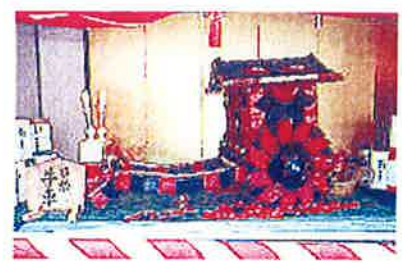
中央



榛ノ木原



東



水口

平成 12 年度本陣飾り物写真



新



旭



六日



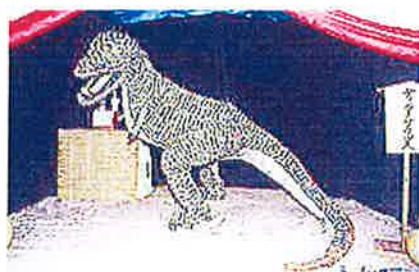
坂ノ下



天王



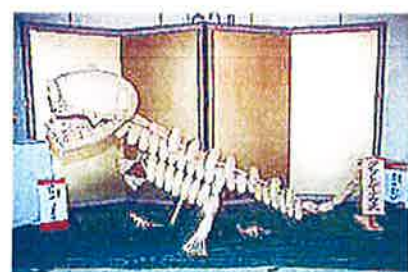
新富



中央



春日



脇出



上八日



稲荷山



水口



下八日



八日



十日



古



榛ノ木原



東

平成 13 年度 本陣飾り物写真



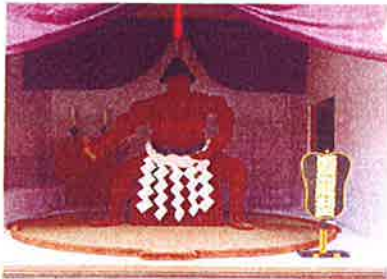
旭



稻荷山



下八日



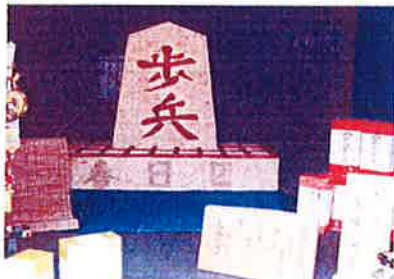
古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



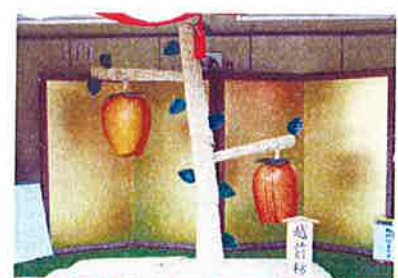
東



八日



六日



脇出

平成 14 年度 本陣飾り物写真



旭



榴荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 15 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 16 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



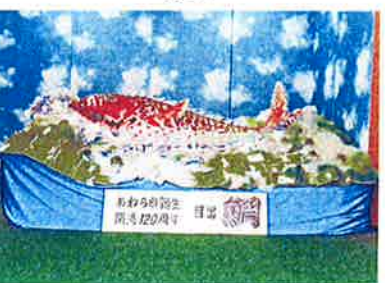
天王



東



八日



六日



脇出

平成 17 年度 本陣飾り物写真



旭



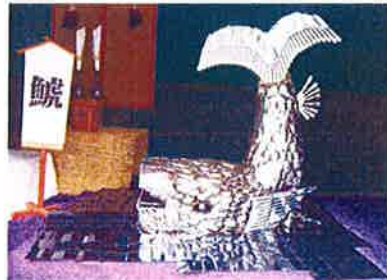
稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



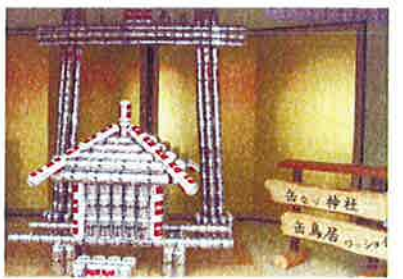
東



八日



六日



脇出

平成 18 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

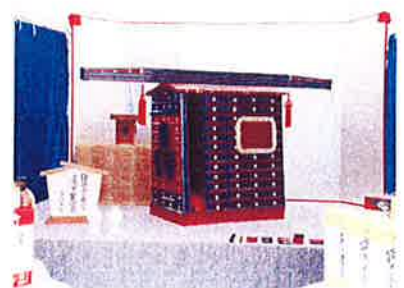
平成 19 年度 本陣飾り物写真



旭



稻荷山



下八日



古



坂ノ下



十



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 20 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 21 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



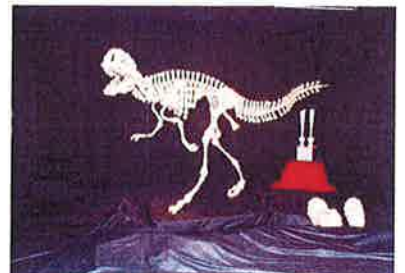
下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 22 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 23 年度 本陣飾り物写真



旭



稲荷山



下八日



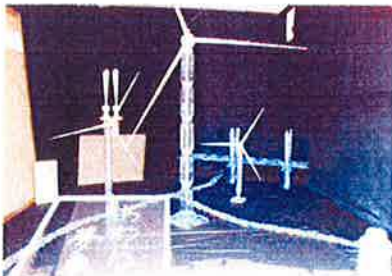
古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



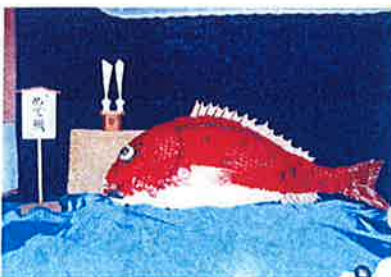
新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 24 年度 本陣飾物写真



旭



稲荷山



下八日



古



坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

平成 25 年度 本陣飾物写真



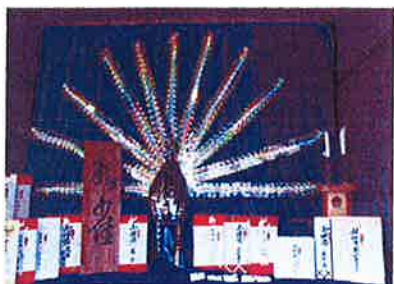
旭



稲荷山



下八日



古



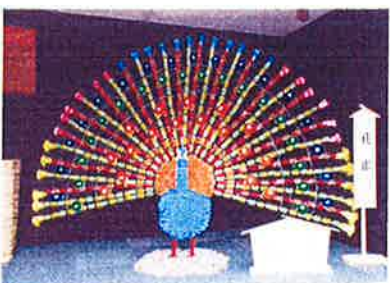
坂ノ下



十日



春日



上八日



新



新富



榛ノ木原



水口



中央



天王



東



八日



六日



脇出

本陣飾り物の題名と材料

	10年		11年		12年		13年	
地区名	題 名	主 材 料	題 名	主 材 料	題 名	主 材 料	題 名	主 材 料
東	未来へGO	漆器	夢の翼	漆器	順風満帆（北前船）	漆器	刈安山の水車小屋	漆器類
旭	ケンタウルス	日用金物品	カジキマグロ	園芸用品 家庭用品	テラノザウルス	日用金物用品	かに	日用金物
新富	七福神『大黒様』	漆器	月兎	漆器	新龍太鼓	漆器	創作の森に共生する昆虫	漆器類
水口	蓮如上人の御影	漆器	葵祭 牛車	漆器、日用品	鬼 瓦	漆器類	灯籠	漆器類
天王	天災は忘れた頃にやってくる	園芸用品	大黒様	漆器	春宮 えびす	しゃもじ・塗 箸・漆器等	虫の世界	主に眼鏡
中央	新横綱『若の花』関	台所用品	リサイクル 介護を支える車椅子	空缶	ティラノサウルス	金タワシ・金網	夫婦へび	園芸用品
春日	カメ・ライダー	スプーン	春日燈籠	ガラスコップ 灰皿等	蓮如さん 金津音頭でドド ンとネ	竹製品	いつか、と金で大暴れ	麩
脇出	脇出探査機『のぞみ』		だんご3兄弟	竹製ざる	タケトザウルス	竹製品	越前柿	龍簾
上八日	虚無僧	台所用品	零戦	竹製品	鯛	漆器類	辛巳本陣	園芸用スコップ
稲荷山	ワールドカップ	束子ほか	夏祭り 団子・屋台・風景	硬貨、画紙 簾、植木鉢等	I T革命	お盆・マク・マク・ 収納ケース・各種小 物ケース・ホス ク、要紙及各種	ゆにばーさる すたじお	クロス、スポンジ 金たわし、金網、新聞紙
坂ノ下	御神輿	漆器	長寿亀	漆器	沖縄サミット 守礼門	漆器	蓮如上人の里金津 蓮如上人像	重箱、お椀等の漆器
下八日	鷹	スプーン 包丁等	ふるさとの風景 刈安山の水車小屋	漆器、塗箸等	清水原の名水くみ	漆器、塗箸等	うわさのメールマガジン	上敷紙、弁当箱、漆器類
八日	創作の森『ガラス工房』	竹製品	恐竜	家庭金物	嫁おとし肉付乃面	竹製品	金津町花 うめ	漆器類
十日	元気に育つ『竹田川の鯉』	漆器	折り鶴	漆器	神の国の箸跡	箸	2001年 夏の記録	CD、FAなどの記憶メディア キーボード、LANケーブル 鉛筆
六日	市姫の『孔雀』	陶器	創作の森に祝舞の藤娘	陶器一式	龍 神	陶器一式	新世紀（2001） わにの大ジャンプ	陶器
古	狂言『金津地蔵』	漆器	徹軒燈籠	漆器	人力車	漆器	雲龍型（力士）	タワシ
新	昇龍	瓦	蛙と蛇	越前瓦	鯉の滝登り	越前瓦	鶴	越前瓦
榛ノ木原	明石海峡大橋	漆器	サッチー蠅螂	箒帚	蜘蛛	藤かご・おしぼ り入れ・タワシ	鎧兜	おろし金、フライ返し 灰皿、菜箸、重箱

平成22年				平成23年			平成24年		
賞名	地区名	題 名	主 材 料	地区名	題 名	主 材 料	地区名	題 名	主 材 料
あわらし市長賞	六日	鏡獅子	陶器類一式	東	北の庄城（希望の旅立ち三姉妹・日本）	漆器一式	榛ノ木原	昇龍	包丁、スプーン、 鎌、ビニール、ホース等
商工会長賞	十日	広がれ龍馬の夢「金津孔雀伝」	レンゲ	天王	東北復興へ 伊達政宗出陣	漆器類、箸等	六日	躍動	陶器一式
市観光協会賞	八日	蓮如の里 金津	簀・竹のざる	六日	翁舞	陶器一式	天王	水墨画 雲竜	漆器
議会議長賞	天王	黒船（日米修交）	漆器類	十日	黄龍の舞	れんげ	新	唐門 一乗谷朝倉氏遺跡	漆器、漆器プラスチック
県連合会長賞	稲荷山	幸福を呼ぶ手ふくろう	軍手、トレイ	中央	めで鯛	しゃもじ、箸、巻きす 他	十日	祝！重要文化財指定 桑野遺跡より発掘の角竜クワノラトプス	レンゲ
県観光連盟賞	榛ノ木原	しあわせを運ぶ幸の鳥	包丁・スプーン	新	復興丸	漆器	下八日	翔け あわらし市 -市の鳥 白鷺-	スプーン・ナイフ・ストロー・箸

平成25年			
賞名	地区名	題 名	主 材 料
あわらし市長賞	十 日	麒麟絵馬	レンゲ、スプーン、包丁
商工会長賞	東	東家本陣 IKUSSA 戦	各種漆器
市観光協会賞	旭	旭のかわせみ	台所金物類、バック、ノコギリ
議会議長賞	天 王	蓮如上人 祈りの道	本
県連合会長賞	六 日	狸	陶器
県観光連盟賞	新	御所車	漆器、プラスチック

表7 本陣飾り物の参画の実績(S44~H1・H9)

年	南部ブロック					東部ブロック					西部ブロック								参加区	備 考
	東	榛ノ木原	古	六日	新	水口	天王	中央	新富	旭	十日	下八日	坂ノ下	春日	脇出	八日	上八日	稲荷山		
S44	○		⊗	○		⊗	○		○		○		×		○	○	○		10	
S45				×		○	×		○		○	□		□	×	○			6	
S46			○		×	○	○		×							⊗			4	
S47	×					⊗						○			○	○	⊗		5	
S48			×	○		○	×		○		⊗			○	○	○	○		8	
S49	○			⊗	□	○			⊗		○	×		○		○			8	新:本陣飾初参加
S50	○		○	○	⊗	⊗			○	□	○	○	×	○	○	○	○		13	旭: "
S51	⊗			○	○	○	×		○	○	○	○		○	⊗	○	○	□	13	稲荷山: "
S52	○	□	⊗	○	○	○	○		⊗	○	○	○		○	○	⊗	○	○	16	榛ノ木原: "
S53	○	○	○	⊗	○	⊗	○	□	○	○	○	○	□	○	○	○	⊗		17	中央・坂ノ下: "
S54	○	○	○	○	⊗	○	⊗	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	18	
S55	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	○		17	
S56	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	18	
S57	○	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	○	18	
S58	○	○	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	18	中央:山車初参加
S59	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	18	
S60	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	18	
S61	○	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	18	
S62	○	○	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	18	
S63	⊗	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	⊗	○	○	○	○	18	春日:山車初参加
H元	○	○	⊗	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	○	18	
H 9	○	⊗	○	○	○	⊗	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⊗	○	○	18	榛ノ木原:山車初参加

×:山車当番区 ○:本陣飾り物参加 □:山車又は本陣飾り物参

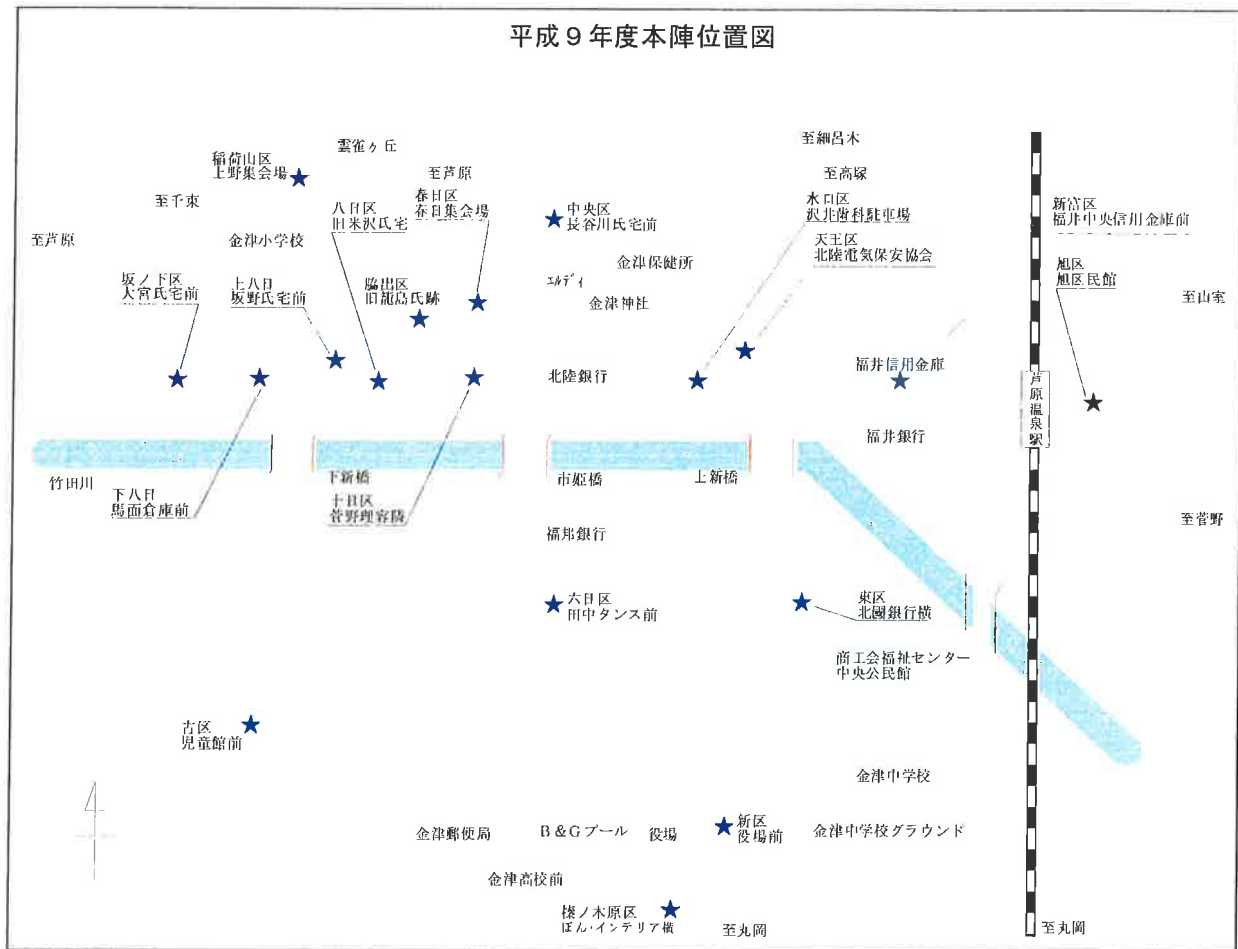
「本陣飾り物」=本陣飾り

(天王・東・新富・旭→S27年より山車、新富→S34単独

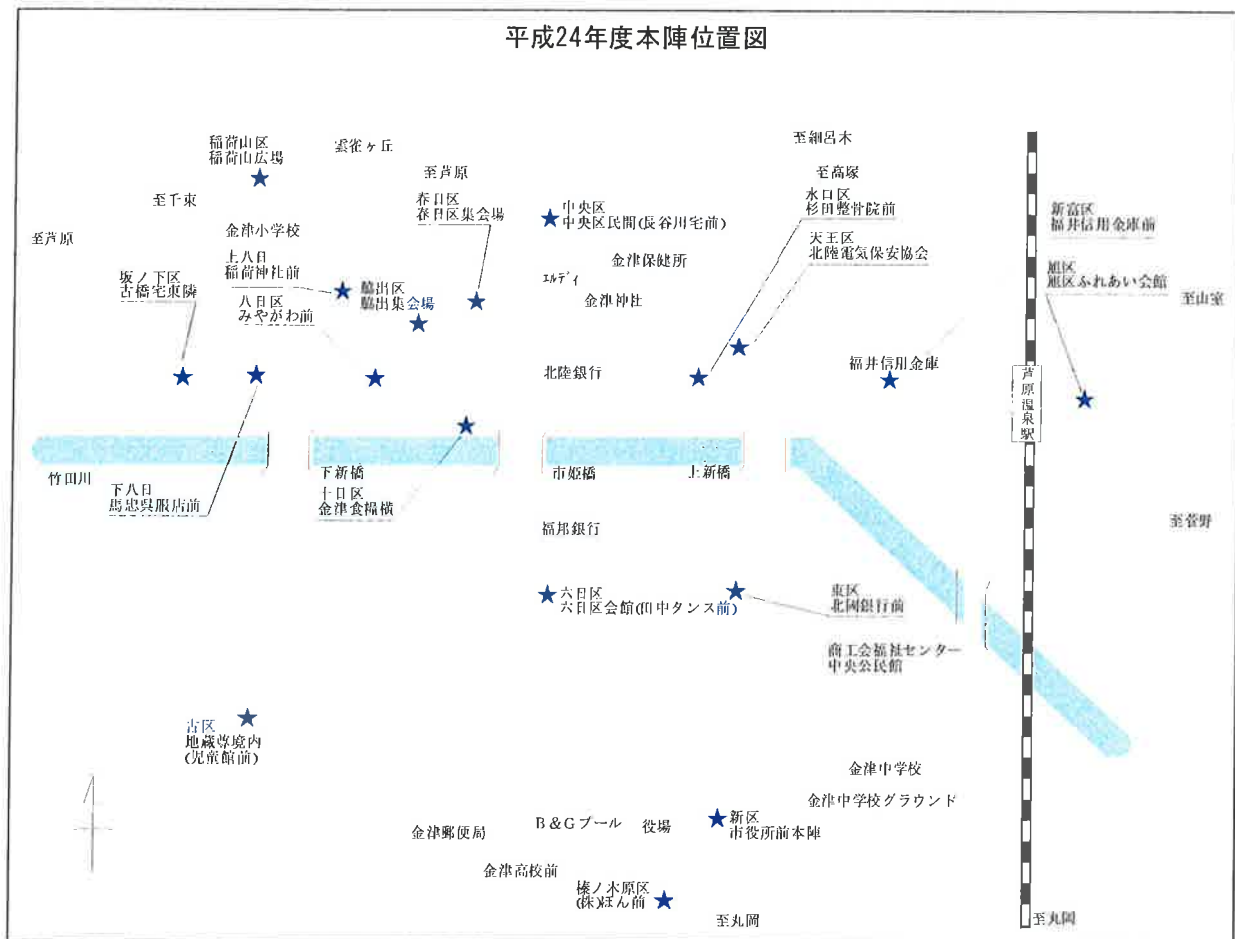
本陣飾り物の展示場所

区名	平成9年度の場所	平成24年度の場所	備考
脇出	旧籠島氏跡	脇出集会場	
上八日	坂野氏他区前	稲荷神社前	
稲荷山	上野集会場	稲荷山広場	
春日	春日区集会場	春日区集会場	
中央	長谷川氏宅前	長谷川宅前	
天王	電気保安協会前	電気保安協会前	
新富	福井中央信用金庫前	福井信用金庫前	
旭	旭区民館	旭区ふれあい会館	
水口	沢井歯科駐車場	杉田整骨院前	
六日	田中タンス前	六日区会館	
東	北國銀行横	北國銀行前	
新	役場前	市役所前本陣	H8年本陣会館
榛ノ木原	ぼん・いんてりあ横	(株)ぼん前	
古	児童館前	地藏尊境内	
下八日	馬面倉庫前	馬忠呉服店前	
坂ノ下	大宮氏宅前	平橋宅東隣	
八日	旧米沢氏宅	みやがわ前	
十日	菅野理容隣	金津食糧横	

平成9年度本陣位置図



平成24年度本陣位置図



[illegible]

本書編集に関わった人

(本文)

山 本 宣 春	桜ヶ丘区区長
住 田 達 映	中央区区長

(山車写真)

佐々木 誠 三	金津祭囃子保村会会長
東 田 俊 夫	新富区区長
木 村 紀 夫	脇出区区長
榊 富次夫	上八日区区長
端 譲 二	坂ノ下区区長
圓 道 貢 紀	新区区長
疋 田 長 男	東区区長
館 邦 夫	古区
埜 沢 昇	天王区

(本陣飾物写真)

あわらし商工会金津支部

(データ入力・画像データ編集)

武 田 忠 男	桜ヶ丘区副区長
---------	---------

(金津地区区長会特別委員会 広報担当)

委員長	榊 富次夫	上八日区区長
部長	土 岐 良 一	下八日区区長
委員	小 林 武 一	天王区区長
〃	宮 川 謙 次	向ヶ丘区区長
〃	疋 田 長 男	東区区長
〃	矢 野 博	稲荷山区区長
〃	山 本 宣 春	桜ヶ丘区区長

発行 金津地区区長会 (平成 25 年 11 月吉日)